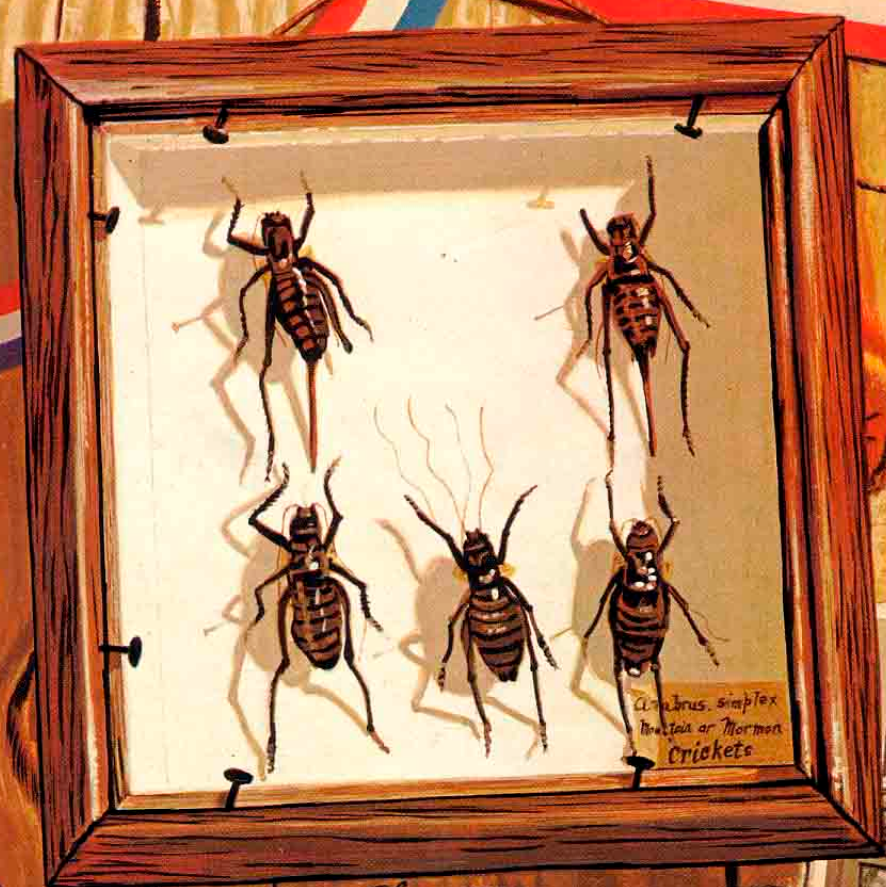






心の糧

十二使徒評議員会補助

フランクリン D. リチャーズ

末日聖徒イエス・キリスト教会のきわだった、特徴の一つは、その仕事の有給の牧師ではなく、普通の会員により運営されているということである。「あなたの教会で最も印象に残ることは、年齢にかかわらずすべての人に奉仕の機会が与えられていることだ」と教会員でない私の二、三の友人がよく言っている。いかにもこれは真実である。実際教会は、神の子供たちが進歩、成長へ向う乗物のようなものである。

つまり、指導性を与え、これを伸ばすよい機会が、興味ある健全な活動計画に参加するあらゆる年齢層の男女、子供たちに与えられているのである。これは大切な特権であると同時に教会員の責任ともなる。なぜなら、教会の発展は、指導者の成長いかににかかっており、その指導者には全教会の管理はもとより、伝道部、ステーク部、ワード部、神権定員会、補助組織、その他の教会組織および活動のための指導者が含まれるからである。

我々は奉仕の機会と才能を伸ばす機会があまりにも多すぎて、それが過度の犠牲を求めていると時々思うかもしれない。しかしながら、我々はそれを犠牲ではなく、偉大な祝福と考えるように私は提案したい。

天の父が完全であられるように、我々一人一人も完全な者となりなさいという救い主の偉大なチャレンジを、決して忘れてはならない。

我々が参加する各活動は、才能を伸ばすことのできる機会を与え、完成という我々の目標達成に太いに役立ってくれる。

我々が与える精神および分かち合う精神を高揚する時、成長、発展はもちろんのこと、大きな平安、幸福、喜び、満足が得られるのである。

—も く じ—

予言者のことば

四つの道標	大管長 デビド O. マッケイ	309
研究と信仰とによりて学問を求むべし	ローウェル L. ベニオン	311
モルモニズム	ドイル L. グリーン	314

特別記事

英国諸島における回復された福音		319
-----------------	--	-----

扶助協会

断食と祈り	マリアンヌ C. シャープ	322
-------	---------------	-----

日曜学校

聖書は心の友	ジュエル B. エルキングトン	323
--------	-----------------	-----

管理監督会ページ

悔い改めについて	ジョン H. バンデンバーグ	325
----------	----------------	-----

若人のページ

私が持たなかった五つの思い出	ある大学生	327
十の力	ベン F. モータンサン	328
月旅行と地球へのメッセージ	G. ホーマー グーラム博士	330
権威の尊重と福音	スターリング R. プロボスト	331
伝道部長メッセージ		333
ローカル・ニュース		334
十分にしないこと	リチャード L. エバンズ	裏表紙

子供のページ

獅子の如く勇敢に	マージェリイ S. キャノン, ローリン G. ウイルキンソン	78
それは何ですか?そしてどこからきたのですか?	マウラ・ケイ	80

今月の表紙

7月は記念の月であり、世界のいくつかの国々で、独立記念日が祝われる。聖徒たちがソルト・レーク盆地に入植したのも7月下旬のことであった。

ジェリー・トンプソン画伯の絵はあらゆる教会員に対する遺産(記念品)の一部を描いている。すなわちオハイオ州からはカートランド・セイフティ・ソサイエティ銀行紙幣、イリノイ州から、ノーブー退役砲兵隊の勲章、ノーブー軍団の予言者ジョセフ・スミスが身につけていた軍刀、殉教の際に凶弾をくい止めたジョン・ティラー(後の大管長)の懐中時計とカーセージ牢獄の鍵、初期のソルト・レーク盆地から、カモメとイナゴおよびブリガム・ヤング大管長の古い銀板写真。本文「モルモニズム」314ページを参照。

両親の責任

我々は非常に重大な時代に生きている。動揺のあらゆるきざしが見え、世界はかつてなかったほどに、混乱しているようである。古い体制や方法が新しいものに、速やかに道をゆずっている。この動揺の真只中で、社会を構成する基となっている家庭もおびやかされている。

末日聖徒は、家族の絆が永遠であることを知っている故に、神聖な家族制度を存続させるという責任が、あなたがたの上に大きくかかってくるのである。末日聖徒の家庭の中に、束の間のものは存在しない。また末日聖徒の家族関係に、この世限りのものは存在しない。そのようなあらゆる絆は永遠であり、持続されねばならない。

末日聖徒にとって、家庭はまことに社会の第一の単位であって、親であることは神であることに次ぐのである。両親と子供との関係は、国やさらに大きな社会において、子供たちを理想の市民とさせうるものでなければならない。立派な市民となる秘訣は家庭の中に存している。神と世の贖い主なる御子とその教会の組織に対する信仰を育む秘訣は家庭に存している。家庭はすべての中心なのである。

神はこれらの教えを子供たちの心に吹き込む責任をその両親たちの上に置かれた。若い人々の成長と導きを助けるために設立された日曜学校、MIA、初等協会やセミナーはみな大いに役立ってくれる。しかし、これら若い人々の生活になじんでいる非常に大切な要素となっているものでさえも、家庭における両親の永遠性と影響力に、とって代ることはできないのである。

忠実な人

己れに忠実な人は、真理に逆らって嘘を言わない。すべての人の内に、神より与えられた聖なるものが存している。内なる神性に忠実な人は、主に対しても仲間に対しても忠実である。

正しいと知っていることに不誠実な人は、揺れ動く弱い人である。その人は光から足を踏み外し、その聖なる存在からはずれてはるかに遠ざかってしまい、悲しみが彼をおそうであろう。

我々は、キリストの福音を持ち、悪に対抗しようという覚

四 つ の 道 標

大管長 デビッド O. マッケイ



悟のほどを世に宣言してきた。

人々をただ喜ばせるために、あるいはまた「献身的奉仕」よりも「目の前だけの奉仕」をしたいという理由で、我々はこの大義を棄ててしまうであろうか？いやそうではない。我々は自分自身に、我々の内なる神性に、またその受けた真理に忠実に従うであろう。我々は、まわりをかこむ悪に、悲慘と絶望の暗やみへ教会の若人を連れ去ることを許してはならないことを知る必要がある。今すぐに誠をつくして行動しよう。我々を試みようとする人々の仲間に入れられた時、死に至るまでも真実に生きようではないか。

世界を動かしてきたすべての人々、たとえばペテロ、ヤコブ、パウロ、古代の使徒である兄弟たちやその他の人々は、彼らの良心に忠実な人々であった。

ニューヨーク州パルマイラの宗教指導者たちが、聖なる森で若いジョセフ・スミスが体験したことの故に、彼を迫害した時、ジョセフ・スミスは胸中に主イエスに対する証を懐いて次のように述べた。「……私は示現を受けたのであるからそれが事実であることを身を以て知っている。私は神がそれを知りたもうことを知っている。私はそれを打ち消すことはできなかった。また敢て打ち消そうともしなかった。」(ジョセフ・スミス2:25)

ジョセフ・スミスは最後までその証に忠実であった。彼はイリノイ州カーセージの牢獄に近づいた時、同行した人々にこのように言ったのである。「われは、今ほふり場に引かる子羊の如く行く。されど、わが心は夏の朝の如くに穏かなり。わが良心は神に對しましたすべての人に対しいささかの咎めもなし。」(教会歴史記録第6巻P.555)なぜであろうか？彼は自らの証に忠実であり、真に勇ましく生きた。彼は真実の勇氣を持っていた。

それこそ、末日聖徒が真理を守る際に持つべき雄々しさである。それが同じ真理を若い人を導く召に働く時に、我々すべてが必要とするものである。我々があらゆる誤りと闘うのに必要なのはまさにその忠実な心なのである。

「心を雄々しくせよ」

行ないを示して神によしとされるその一つが我々の理想を守り抜く勇氣である。今や人々は、現在の病いの万病薬としてさし出されるあらゆる人をまどわす理論により、あわてたり、附和雷同してはならない時である。また時代は勇敢な若者が道徳の標準を高く掲げることを求めている。その分野において、我々は最も真実な勇氣を見ることができる。

英雄的資質は勇氣の一語につきると言われている。しかし、最も偉大な英雄は、必ずしも戦場において見られるとは限らない。家庭にある若者の中にもこのような英雄を見ることができる。若者のもつ人格と生命のエネルギーを弱めてしまうような事柄に敢然と対抗し、非難する青年男女を家庭で見ることのできるのである。

マーク・ホプキンス(アメリカの哲学者)はこのように語

っている。

「世界史上、道徳的に正しい生活をする英雄を、これほど必要とする時代はかつてなかった。世界はそのような人物を待っている。神の摂理は、科学が彼らのために働き、道を備えるように命じてきた。彼らのために、科学は鉄の軌道を敷き、電線を張りめぐらし、大洋に橋をかけている。しかし、彼らはどこにいるのか？現代の人間関係および国際関係に、より高い生命の息を吹き込んでくれるのは一体誰であろうか？」

またある偉大な科学者は言っている。「世界で最も大切なことは、ガリレオやファラデーやその他の人々の発見ではなく、道徳的、靈的価値の存在を信じることである」

私はイエス・キリストの福音の道徳的、靈的価値を持ち続けるために、若人に勇氣を持つように訴えるものである。「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。」(マタイ16:26)

打ち勝つ力と天父の個人的な親しいご加護を信じ、勇氣をもって困難に立ち向かうではないか。

「すべて主を待ち望む者よ。心を雄々しくせよ。そうすれば主はあなたを強められる」(欽定訳詩篇31:24)

自らに問わせよう

我々は教会の中で時々二つのグループの人々に会う、すなわち建設的な人々とつぶやく人々である。「私はどちらに属するであろうか」と自らに問わせてみよう。

我々は務めを果たすために召されている。神権および補助組織の指導者が新しい計画を紹介すると、会員の多くは「はい、やります。これらの新しい計画をなし遂げましょう」と言う。しかし、「いいえ、そんなことはできません」という人々のつぶやきやあさがしの声を聞くこともたびたびある。判断を誤ると、ある人は神の声に喜んで従ったニーファイのようにではなく、レーマンやレミュエルのようになることに、自らすぐに気づくのである。(1ニーファイ17:17参照)

我々は自身を見守り、指導者によって示される模範に心から従って生活しよう。次のような警告が度々発せられている。「権威ある者にさからってはならない」これはどういう意味であろうか。「不平を言ってはならない」ということである。神権および補助組織の指導者に不平を鳴らすことが、末日聖徒の家庭に入り込むと最も害のある事の一つとなる。なぜ指導者はその地位に召されているのであろうか。自らの利益のためであろうか。いや、いまだかつて個人的な利益のために召された人の例を、この教会であげることはいくつかある。ある召がなされる時、それは誰かを、クラスの人々をあるいは広く人間を祝福するためになされるのである。それは教会の大管長から最近の改宗者に至るまで、全会員の使命なのである。すべての人は王国を建設し、人々を祝福し、人類社会に義と貞潔と高德をもたらすためにその地位につくのである。

研究と信仰

とによりて学問

を求むべし

ローウェル L. ベニオン博士

「……汝ら最も善き書より知恵ある言葉を探し求めよ。また正に研究と信仰とによりて学問を求むべし。」（教義と聖約 88：118）

勇

気あるエライジャはカルメル山に立って、古代イスラエルの民に叫んだ。「あなたがたはいつまで二つのものの間に迷っているのか。主が神ならばそれに従え。しかしバアルが神ならば、それに従え。民はひと言も彼に答えなかった。」（列王上18：21）道理は明白である。バアルに仕えるか、生ける神に仕えるか、エライジャはどちらか片方を取れと言ったのであった。

現代のイスラエルにとって、選択はそれと明らかに異っている。我々には、徳、罪惡、愚かさ、知恵などが代々を経て引き継がれてきた。古代イスラエル人の生活はそう豊かでも驚異に満ちてもおらず、非常に複雑、不確かで動揺していた。先祖の信仰に育まれ、人の世に移り変わりゆく知恵を集め、知識を豊かに受けた末日聖徒の若人には、正しい人生觀を築くという大切な仕事がある。人生を満たすその正しい中身は、どこに見出せるのであろうか。

西洋文明の生活と思想を育んだ二つのおもな遺産が、ユダヤに発祥したキリスト教の信仰とギリシャ人の合理性である。ヘブライの予言者やイエス、パウロから、我々は人間關係に正義と慈悲を命じたもう真理の啓示者、生ける神への信仰を得る。法治主義、民主主義、個人の尊嚴、弱者への同情、権利と財産の機会均等など、大切に引き継がれてきた制度は、予言者たちのもたらしたものである。

ヘブライの予言者と違って、ギリシャの哲人たちは深い信仰の心を持たなかった。彼らはむしろ、ものを考え造り出すといった人の偉大な能力の発見に力を注いだ。たぐいえない文学、彫刻、建築を産み、洞察と客観的な態度の両面から、人自らや宇宙を研究した。ギリシャ人は哲学と近代科学の基礎を築いたのである。

このように我々は、ユダヤ人とキリスト教から「信じる意志」と「義に対する飢えと渇き」を受け継ぎ、また特にギリシャ人から尋ね求め批判する心の態度を受け継いだ。ウィリアム・ジェームスは信心深い人々をやさしい気質の人々と呼び、哲学者や科学者を頑健な気質の人々と呼んだ。末日聖徒の若人はこの両方でありたまえ。——しかし、それは容易なことでない。

回復には、信仰と合理性がみごとに一体となっている。回



復された福音の中には、生ける神とその御子イエス、および神の子としての人間の尊厳への信仰が再び教えられており、聖典や予言者が力を込めて説いた義が改めてもう一度強調されている。しかし、その上にさらに何かが、すなわちギリシャ人の理性に類似するような何かを加えられているのである。回復された福音は、冷凍機から取り出した凍った果物のように、完全に固まった形で人に与えられるのではなく、山の泉からあふれ出る水のようにであらねばならなかった。芸術や科学と同様に、宗教も、人が必要とし、探り求めるのに応じて神より啓示を与えられ成長してゆくものである。

ジョセフ・スミスも、聖典や予言者があらゆる知識を与えてくれるのでないことを知っていた。「人は努めて善き業に従い、多くの事をその自由意志によりて為し遂げよ。……そは人自らの中に自由の意志ありて己れの事を自ら為す者なればなり」(教義と聖約58:27~28) 末日聖徒がはじめに建てた家は、礼拝の家であるとともに、人が研究と信仰によって学問を求め、最もよき書から知恵を得るために学ぶ学問の家でもあった。そこでは神学だけでなく、天文学、系図、歴史、政治学、時事、国語、をも学んでいた。(教義と聖約88)

近代の啓示は考えることを勧めており、啓示中にも考えるべきことが教えられている。「神の栄光は英知なり」「人は無知にして救われること能わず」「すべての王国には皆一つの律法を与えられる」「定められた一つの変らざる律法あり」などの大いなることばは、若人に家や外で学ぼうという望みを植えつけている。

有名なブリカム・ヤング、B. H. ロバーツ、ジェームス E. タルメージ、ジョン A. ウィットソーなどのモルモンの作家たちは、回復された福音の理にかなった点を強調してきた。それはウィットソー博士の初期の作品、「神学の合理性」という本のタイトルに説明されるであろう。

回復された福音に見られる信仰と理性の結合は、我々の要求するところと一致する。しかし同時にそれは衝突を生じる原因でもある。若人は信仰によって学問を求めよと教えられ、大学へ行くが、キリスト教の信仰を抱く末日聖徒は時々自分の信仰の基礎をゆすぶられる。リックス・カレッジ、BYU、インスティテュート、セミナリーなどが、現世の学問を探求する際に学生の信仰を守る助けとなるべく設立されてきたが、つまるところ、自分の道を見出して、信仰と理性を矛盾なく結合させることは、個人個人にまかされている。

若人にとって、宗教にもとづく信仰をこの世の思考にもとづく理性と調和させることが難しいのは、なんら不思議でない。言葉も心も価値判断の基準も一人一人違う。世界がばらばらのように見えることもあろう。末日聖徒の若者にも新しい知的な関心を得て宗教を捨てる人や、大切な自分の信仰を失うことを恐れて、学問上あともどりする人がある。だが、信仰と理性を二つながら正しく認識して、それにのっとって生きる人々もいる。真剣な探求と信仰の試練に導くならば、衝突も健全である。

回復された福音の精神と真髄を知り得た末日聖徒は、人生を見る時に信仰と理性の一方を選ぶのではなく、信仰と理性を両方自分のものとするのである。我々の宗教は、探求の心と信仰の心とを深く尊重することを教える。宇宙を力なくまわり続ける偶然の生きものとして自主性のない状態に生きる人間は、信仰と絶望のどちらをも選ぶこともできる。しかし、自分の人生を生きたいと望む人は、信仰によってこそその望みを最良に達成できるのである。さらに言えば、個としての人間にそれぞれ与えられたかけがえのない心というものを十分に用いないことは、すなわち神の子供、人間としての本質を拒むことである。今までのことをふり返り、そのための方法を提案して結論としよう。

1. 人は信仰と理性の相違を尊重せねばならない。そこに他人と同じ画一的な人生の見方を期待してはならない。結婚を例にとって考えると、男性と女性が同じように感じ、考え行動することを求めるとしたら、その二人は大きく誤ってしまう。二人とも外見も役割も明らかに異った人間であるから、互いに同じことを要求するのではなく、不足を補いあうべきである。そのことが哲学あるいは科学と、宗教との間にも言える。さらに説明を加えて明らかにしよう。

地質学は、地球の構造と歴史を、因果関係に基いて組織的、実験的、包括的に研究する学問である。創造の過程がどのようなであったか、という大きな問題について、科学書や論文が幾千となく流布してきた。

宗教も地球に関心を寄せている。しかしそれは違った視点からである。聖典は創造についてくわしいことをほとんど語っていない。たとえば侵食の原因結果を何も教えていない。創世紀に述べられているのは「はじめに神は天と地とを創造された」という言葉であり、「……かわいた地が現われよ」「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り…」と神が語られたということである。(創世記1 参照) モーセの書の第一章には御父と御子の果てしない創造の業がごく簡単にこう述べられている。「無数の世界」と。……天文学、物理学、化学、あるいは地質学の言葉ではなく、「人に不死不滅と永遠の生命をもたらす」という創造の神聖な目的を信じる信仰をうながす言葉として……。

創造主をたたえて主とその御業を信頼し、あがめるために聖典はよく自然をとりあげている。詩篇の8、23篇、ヨブ記38~41章、教義と聖約88章を読んでみたまえ。その目的をよく感じることであろう。科学は自然を客観的、機械的に説明するが、宗教は、神を信じその御名を尊び人生の目的を知るようにと、魂をふるいおこし高きを望ませる詩的な言葉を用いる。

科学と宗教の間には本来重なりあうところがある。たとえば「タバコは身体のためにならず…」という知恵の言葉がそれである。しかしその言葉は科学用語で述べられておらず科学実験によって証明もされず、ただ主の御言葉として簡単に教えられているだけである。啓示全体は宗教的である。

ほとんどの聖句は、科学以前の時代に生きた人間の、教科書に使うように正確でくわしい言葉ではなく、信仰と倫理の言葉を通して我々に与えられた。聖典は、神やキリストと我々との関係、隣人に対する我々の道徳的責任を教える。それは信仰、道徳、隣人愛の教えである。我々が創世紀から地質学や動物学を、あるいは詩篇から天文学、教義と聖約から物理学、ヨナ書から生理学を学ぼうとするならば、大きな誤りをおかしてしまう。

宗教は非科学的、非哲学的、非合理的なものではない。実験や合理性に立脚するものである。人の目的や生物界に占める人間の位置を明らかにすることによって、あらゆる生命に意味を与えようとする宗教は、科学の知識を超えている。純粹に科学的な観点から見れば、人はある生物学者の語ったように「永遠のふちに立たされた無用な極小の存在」と思われることであろう。しかし宗教は宇宙の地球に存在する人間に意味を与えている。

2. 科学も宗教も謙遜に歩むことを教える。両方とも人間の視野が地球に限られているゆえに、未知の事柄が既知の事柄よりはるかに多いのである。

近代科学の天才、アイザック・ニュートン卿は言った。「私は世に対して自分がどのような者であるかを知らない。しかし私自身にとって、私は、すべてが未知のままに広がる広大な真理の海を前にして、時々ふつうの貝よりもきれいな貝や見慣れた石よりもなめらかな石をひろったとて喜びながら、海辺にたわむれている少年のように思える」（プルスター、*「ニュートンの自叙伝」*第2巻27章）名を受けるに値する科学者はみな、自分の下した結論が仮説であって、現在の見解もさらに高い見解が現われた時にはその意味が変わることを知っている。彼らは、幾分人の生命を明らかにしてゆく実り多い仕事であるゆえに、科学を研究するのである。

宗教もそれと同じ謙遜の心を促す。主はヨブに答えられた「無知の言葉をもって、神の計りごとを暗くするこの者はだれか」（ヨブ38：2）。またベンジャミン王は明らかに述べた「……人間は主の悟りたもうことをことごとくは悟れないことを信ぜよ」（モーサヤ4：9）。イザヤは言った、「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い」（イザヤ55：8～9）パウロははっきり結論している、「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう」（Iコリント13：12）

福音が御父と御子と聖霊から啓示を通して与えられているとは言え、それは「……僕らの理解せんがため、彼らの言葉ぶりにならいてわが僕らの弱きままに与えられ」なくてはな

らなかった。（教義と聖約1：24）人は人として見るのであって、神として見るのではない。我々は永遠にわたって創造主から教えられるので、探求する広い心と大胆かつ謙遜な態度を持つことは我々に似つかわしい。

3. 科学、宗教とも、それに対する自分の見解が成長し変化することを認めよ。我々はこれまでに、科学の発見には本来仮説的な性格のあることや、すでに知られていることがごく少ないということを述べてきた。それは宗教についても真実である。福音には永遠の原則が包含されているが、その完全な意味は神のみ知りたもう。神、自由、愛、悔い改め、その他の原則が真実どのようなものであるかを完全に知っている人は一人もいない。そのゆえに、信仰と理性の事柄に関して、心を広く保つことが大切になる。正直に関する現在の私の考え方は、子供の時に、うそをつかず盗まないことという言葉で教えられた考えよりも、ずっと大きくなっている。他のあらゆる原則に対してもそれはあてはまるであろう。私は今もなお、愛を理解し、どのようにしたら友人や「敵」にも愛を表現せるかを知らうと努め、その原則を仕事や市民活動や国際関係にどうあてはめるべきかを知らうと努めている。

不滅の作品「ファウスト」でゲーテは言った、「父の遺産から何を借りようとも、真に所有するためには働いてそれを獲得せよ」。どの世代にあっても、末日聖徒は各々自分の時間を用い自分の環境にあって自分で福音を学ばなくてはならない。福音は個人個人の中で、根を張り、木に育ち、つぼみをつけ、花を咲かせ、実を結ばなくてはならない。

4. ヘブライ人の信仰とギリシャ人の合理性両方に忠実でありたまえ。予言者や救い主が信仰と道徳を説いたイエス・キリストの福音は、我々の生活の中でその真実性が立証されてきた。詩篇23篇は、人を訪れる悲劇に抗して、希望と慰めを与えてくれる。信仰、悔い改め、バプテスマによるキリストとの交わりや八福の教えは、真、善、美によって生きる人生の地図を描いてくれる。「信仰へジャンプしなさい」と我々を招く福音は、また論理的でもある。

科学も、我々の生活におけるその真実性、有益性を立証してきた。法や自然の力が科学によって治められて、よい怖れや迷信、疫病が除かれ、寿命は伸びた。科学は我々に学問の精神と方法を教え、素晴らしいやり方で人生の展望を広げている。

信仰と研究の実り多いことが明らかにされた今、我々はどうして片方を除外して良いことがあろうか。衝突しあう分野でなぜ結論を急ぐのであろうか。また、真理を探求する時に、学究的学問や宗教においてなぜ信仰と理性とを用いないのであろうか。

良い人生とは、愛によって教えられ、信仰に支えられ、理性に導かれる人生である。願わくは我々が研究と信仰によって、人生を歩む知恵を得られるように。

モルモニズム

ドイル L. グリーン

編集長

回

復された福音と再び地上に建てられたイエス・キリストの教会についての話、宣教師の持つ証と心からなる働き、モルモン経のおしえ、人々の関心を集めつつ世に広がる神より啓示されたまことの御言葉。この新しい教会を耳にするだけで懐疑の思いをいだく人々の多いなかにも、正直に探求する人々はこの福音に心ひかれた。この町から一人、あの家から二人、人々はいで行きバプテスマを受けた。アメリカ合衆国、カナダ、のちに英国、さらに全世界を通じて改宗する人々は続いた。

神の王国に入る多くの人々は、教会の群れに加わりたく強く望み、故郷を離れて予言者とその民に従った。

この小さな教会が発展してゆくに従って、反対も大きくなり、教会の中心となる場所はニューヨークからオハイオへ、さらにミシシッピの河を越えて合衆国の西の境、ミズーリ州ジャクソン郡に移っていった。新しい信仰の指導者たちは、この辺境の地を教会員の集う理想の場所と考えた。彼ら



教会の宣教師たちは、初めにアメリカ合衆国、次いでカナダ、ヨーロッパ、南の海の島々、そして世界中に福音のメッセージを伝え始める

はそこに土地を買い、家を建て、町を築いた。

しかしそれは成らず、新しい入殖者と古くからの住民の間に共通するものはほとんど見出せなかった。ミズーリの経済社会は南部に見られるごとく、奴隷制の上になりたっていた。人を強制することは、全人類の自由を信じるモルモンの信仰と真っ向から対立した。彼らの予言者は「人類が現世に在るのは幸福を得んためである」と教えた。

多くの人々が合衆国へ移って来て、特に一州に集まると、古くからの住民は政治勢力のバランスが崩れると考えた。その上に、集まる人々の信仰と教義は珍しく変っていたため、彼

らは警戒の心を強めた。モルモンの人々は公然と、骨肉の体を有し豊かな感情と愛を持ちたもう神が、人に不死不滅と永遠の生命をもたらす栄えある御業を為したもうと宣べて、人に反する言葉を語り、回復された完き福音をいただくキリストの教会が、地上でイエスが設立したもうた形に従って再びこの地に打ち建てられたと宣言した。彼らは別個の御三方からなる神会を信じた。あらゆる人間はみな実際に神の息子、娘であって、神に似せて造られたと教えた。

神と人についてのこのように高遠な新しい概念は、従来の人々の理解を越えてまったく異なっていた。それらの人々はその教えを異端の物語であると見なした。

誤解と不信と偏見は人々を暴力へと駆り立てた。知事や法廷への嘆願も受けつけられなかった。他の州に安全な住み家を求める試みも失敗に終わった。ついにモルモンは、知事からの「撲滅令」を受けてミズーリ州を追われたのである。

多くの困難を受けた教会も、束の間ながらイリノイ州に逃げどころを見出した。1839年ジョセフ・スミスは、ミシシッピ河が西に流れるデモインの急流の上手に数百エーカーの荒地を買い入れ、その土地をコマースと呼んだ。そこは「美しいもの」という意味の「ノーヴー」という名に変えられて、民は再び力を尽して家を建て教会や学校を建設した。

1843年のはじめまでにこの「聖徒の町」の人口は一万二千から三千人ほどになった。設立許可が与えられて市制が敷かれた。ノーヴー市は発展しイリノイ州で最も大きな町となった。町を訪れる人々はいうわしい社会とまじめに勤勉に働く人々をほめた。結婚などの神聖な儀式の執り行なわれる美しい神殿建設の仕事も進められた。回復された教会の教えによれば、結婚は神によって定められたものであって、権能を持った人によって正しく執行される結婚は永遠を通じて続くのである。末日聖徒の結婚式に「死が二人をわかつまで」という言葉は聞かれない。

神は人のかたより見たもう御方でなく、あらゆる時代に住んだあらゆる人がみな来たるべき世で神と共に住むための機会を受けるという信仰に従って、彼らは神殿において、この世で真理に耳を傾ける機会にあずからなかった死者にかわって代理の働きを行なうことを願った。

しかし、他の土地で教会を悩ましたと同様の問題がノーヴーでも始まった。宗教上の迫害や不寛容に加えて政治的な相違も起き、予言者は前に被った悲劇を再び繰り返すことを予想した。

1844年2月20日、彼は日記にこう記している。「十二使徒を土地の調査のためにカリフォルニアとオレゴンへ行かせ

ノーヴーの美しい市は焼かれ、住民は家を見捨ててで
きるだけの物を携えて、西方の荒野へと逃れる。エドワ
ード・グリグウェアー

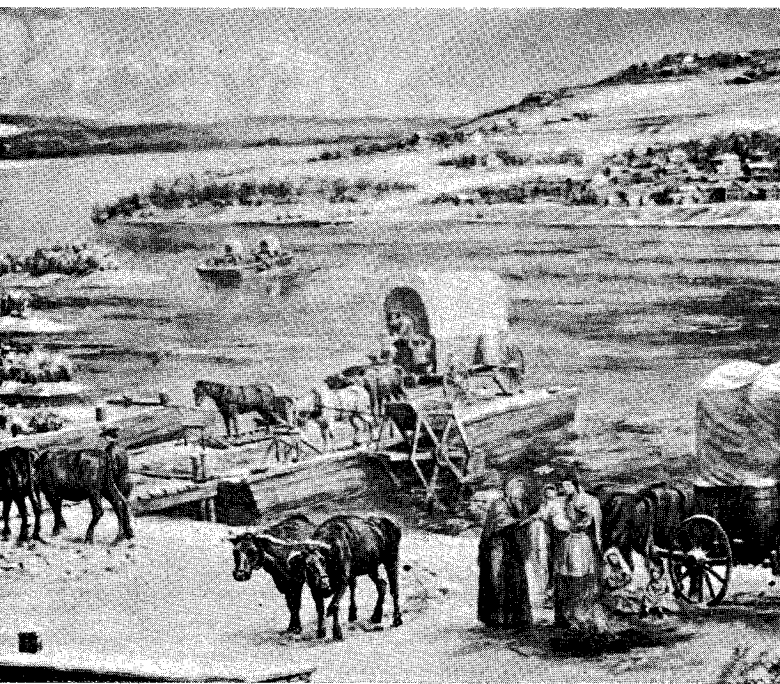


た。悪魔にくつがえされることなく、良い気候のもとで生活し、心ゆくまで生き長らえることのできる土地、また神殿が完成したのちに移り、山中を切り開いて短時日に町を建て、我々自身で市政を司ることのできる良い土地を捜すようにと彼らを遣わした」西部には不吉なきざしを見せる雲と暗黒しか見出せなかった。しかし彼は「西部に光がある」と幾度となく語った。

しかしながら、教会に対する憎悪と反感は急速に増大して土地を調べに行く偵察隊は送られなかった。暴力の嵐はノーヴーを吹きまくり、ジョセフ・スミスと兄ハイラムはミシシッピー河を越えて安全なアイオワへ逃れた。しかしそれも短い間で、ジョセフ・スミスは大勢の人々に引き返すことを要請され、心を決めた彼は大逆罪の責めを受けて捕縛された。

ジョセフは試練を恐れなかった。それまでに偽りのとがを

最初の追い出されたモルモンがノーヴーの住家を去って、ミシシッピー川を渡り、不毛のロッキー山脈の谷へ2,100キロの旅に出発したのは、1846年の真冬であった。リン・フオセット



受けて47回も捕らえられたが、有罪の判決は一度も下されなかった。しかしその時彼は、役人たちが保護を約束したにもかかわらず、自分の死によってモルモン教会が減びると信じた暴徒たちの手から逃れることはできないことを知った。

彼は友に語っている。「もし私の生涯がともがらにとって価値のない生涯であるならば、それは私自身にとって何の益にもならない生涯なのだ」。ジョセフ・スミスは再び河を越えて、知事だけでなく血に飢えた暴徒の待つカーセージへと向かった。町に近づくとジョセフは言った。「私は今はふり場に引かれる子羊のごとくに行く。しかし、私の心は夏の朝

のように穏かである。私の良心は神に対し、またすべての人に対し、いささかの咎めもない。私は罪なくして死ぬ。世の人々は、彼は残忍な者の手によって殺されたと言うであろう」。1844年6月24日のことであった。それから三日のうちに、暴徒はカーセージの牢獄を破り、そこにかくまわれていたジョセフと共にいた人々を襲って、ジョセフとその兄を殺した。予言者ジョセフ・スミスは、証を自らの血によって結びかためたのであった。

教会を設立したジョセフを殺せば教会が崩れると考えていた人々は落胆した。彼らが殉教した後、ノーヴーの民は悲しみわしてまろうばいはしなかった。「落着きなさい、主が神にましますことを知みなさい」。この言葉が人々の指標となった。ブリガム・ヤングを長とする十二使徒評議員会が指導権をとり、教会の組織や働きはほとんど支障なく続いた。主は予言者の死に備えてすべてをよく準備して下さった。

一方、ジョセフの死によって迫害が止むこともなかった。偏見は人々の心を固くし、ノーヴー市の憲章は撤回された。イリノイ州は、モルモンが州を立ち去るようにと要求した。

彼らは何ができたであろう。どこへ行けたであろう。自らの宗教を捨てることはできないことであった。それは、家庭を捨て生命を捨てるよりも大きいことであった。証を捨てることはまさに不可能であった。自ら真であると知っていることをどうして否めようか。

ただ一つの答えしかない。彼らは殉教した予言者の計画に従い、西方めざしてロッキーの山へ向かおうとした。そこではもはや焼かれることのない家を築き、見捨てることのない神殿を建て、喜びをもって神を礼拝できるのである。

アーカンソー州のトーマス・ドリュエ知事は教会指導者に手紙を書いた。

「私は貴殿の申し出られた移民の計画に心より賛同致します。何を主張するよりもまずあなた方の社会を築いてみれば、少なくとも、あなたの組織されたことが現実に耐えぬか否かを試し、また人間の状態を改善してゆく秀れた考えをさらに伸ばし、市民の持つ自由と宗教の自由に貢献するための機会が得られます。末日聖徒がオレゴンに入殖なされば、彼らは博愛者の善意と人道的な友愛をも携えて来られることでしょう。もし彼らが悪い人々であるならば、報酬は大幅に減るでありましょうし、良い人々であるならば、その移民によって、時期が来れば、文明世界全体にそのことを明らかにすることができましょう」。

財産を処分し、幌馬車を作り、それを引く馬や牛を買い、平原や大草原を千五百マイル以上も旅するのに必要な品物を集めるために、彼らは六カ月の猶予を願った。

山の谷間めざして千五百マイルの旅、大陸のほぼ半分ほどの道のりが彼らと迫害者との間をへだてるのである。まばらに入殖者のいるアイオワを五百マイル行き、さらにミズーリ

河を越えてオマハ族、スー族、ウート族の土地を通り、文明からほど遠い未開の地を千マイルも行く旅であった。

六カ月は長すぎないにもかかわらず、暴徒たちは時期を待ちきれずに、暴力はますます激しくなっていた。それと共に、連邦政府が彼らに干渉して計画をはばむかもしれないという噂が広がった。立ち去ることが減びることであってはならぬ。そのようなことを引き起こしてはならぬ。予言者が遭遇した同じ道をたどらぬよう教会を守らなくてはならない。店や仕事場は昼夜休みなく働いた。

最初の一団は1846年2月4日、住みなれた家に別れを告げ、真冬の厳しい寒さの中を河を渡って未開の土地へ逃れた。

船を渡す作業は昼も夜も続けられた。15日までにはミシシッピー河が固く凍って、多くの人は氷の上を渡ることができた。四月の下旬までにはほとんどのモルモンが町を離れた。

町を離れて荒野へ旅立つ時のことを想像してみたまえ。ほとんどの人は辺境の地の厳しさに慣れてはいなかった。迫害者たちは、彼らが荒野で死んでしまうと考えた。

急いで町を離れなくてはならなかったため、大勢の人たちが病にかかった。家をあとにして10マイルほどの地点、シュガー・クリークでキャンプを張った初めての晩に、寒さや嵐から守るためにしつらえられた粗末な仮小屋や幌馬車の中で9人の赤ん坊が生まれた。

しかしキャンプはまもなく組織されて、一行は西に向かった。冬の深い雪の中、春の雨とぬかるみの中、彼らは少しずつ歩を進めて行った。耳は凍てつき、しもやけの足をひきずって未踏の地へ旅を続けることも、迫害者に比べれば取るに足らないことであった。疲れ果てた一日の終りに、聖徒たちは雪をかいて、プラスバンドをかなで、手を打ちあわせ、足を踏みならしてスクエアダンスを踊り、未知の平原の寒空に歌声は響いた。

「他の人が刈り入れられるように種をまこう」という言葉が合言葉になった。春が過ぎ夏が来ると、彼らの通って行った道に沿った何百エーカーの土地は、続いて西に向かう人々によって鋤を入れられ種がまかれていった。あとに続く人々がそれを耕やし、実りの時には他の人々がそれを刈り入れた。

ちょうどその頃合衆国はメキシコとの戦争に巻き込まれていた。6月26日、マウント・ピスガのキャンプへ三人の騎兵が、五百人の義勇兵を募ってカリフォルニアへ向かわせよとの「モルモンへの通達状」を携えてやってきた。

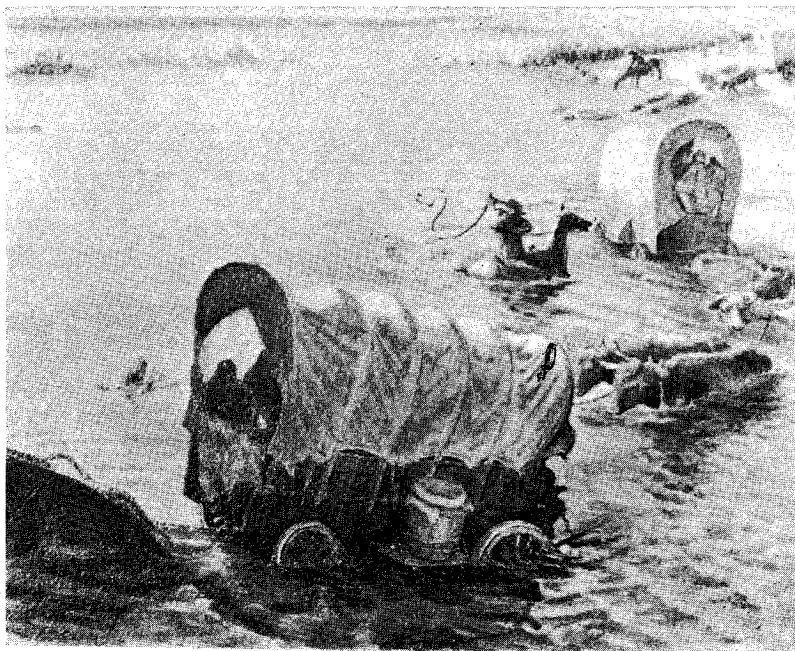
教会指導者はそれ以前に政府の助けを乞うていたが、このような形でその返答がきたのであった。しかし、ブリガム・ヤングはそれを、和平への申し出、モルモンがアメリカ合衆国に忠誠をつくす民であることを合衆国の人々に示すよい機会であると考えた。父親や屈強な若者を要求された人数だけ

そろえることは、すでに苦しい状態にあった家族になおいっそうの重荷を負わせることであると充分承知していたにもかかわらず、ブリガム・ヤングは人々に応募を勤め、五百人の義勇兵が集まった。モルモン大隊はカンサスを通り、今はニューメキシコとなっている未踏の土地や、アリゾナ、カリフォルニアを行軍した。歴史上最長の道のりを行進したモルモン大隊の話は感動に満ちている。彼らはやがて谷で家族と再会した。

1846年の秋までに、一万五千の人々、三千台の幌馬車、三万頭の羊や馬や牛がミズーリ河に移動していた。彼らはそこで冬季間を過ごすことに決めて、ウィンター・クォーターズをできるだけ住みよくしようと働いた。一月のはじめになって、掘立て小屋とも言えないほどに粗末な家が一千戸ほど立てられた。

厳しい冬であった。栄養失調や不十分な衣類とそまつな住

ワイオミングのブラット川を渡る幌馬車隊



まいに加え、重い病気が発生した。ネブラスカ州フロレジスの丘の墓地はその悲惨さを物語っている。その墓地には六百人のモルモンが埋葬された。

しかしついに春がやってきて、「イスラエルの陣営」はブリガム・ヤングらに率いられ、十二使徒に指揮されて、西方へと向かった。

開拓者たちがグレート・ソルトレークの谷へ入り、ブリガム・ヤングがそこを居を定める場と宣言したのは、7月のおわりであった。この大盆地にとうもろこしは育たないというジム・ブリッジャーの言葉も、恐れを知らぬ指導者の勇気をくじきはしなかった。カリフォルニア行きをすすめた人々の

声もうけつけられなかった。

6月26日、ソルトレーク市を見おろすエンサイン・ピークで、ブリガム・ヤングは少数の男たちを前に言った。

「兄弟たちよ、インディアンに備えて探検隊を組織し、行こうと思うところへ行行ってようすを調べてきてくれたまえ。そしてまたここへ戻りよい場所を報告してほしい」

この谷間へ入る一年以上も前に谷を示現に見て、「ここに穀物が育つことをノーヴー神殿の中で知った」と、のちにブリガム・ヤングは語った。

彼はこう書いている。「ジョセフの時代に、我々はこの土地について一度に数時間も話しあった。ここへ移動することについて、私がどうにかできたと思ってほしくない。それは全能者の摂理であった。神の力であった。私がこのような計画を考えつくなど、とうていできなかった」

先発隊が谷に到着してから数時間後には、土地が選ばれ、種をまく準備が始まった。乾燥して固いため耕すことのできない土地だと知った彼らは、山から流れる川をせきとめて、乾き切った地面をうるおした。北米における近代かんがい法の始まりであった。

ゆるがせにできる時間はいつきもなかった。シーズンはすでにおそく、ジム・ブリッジャーは山に早霜の降りることを警告した。種まきが大幅にすすめられ、二、三日のうちに何エーカーもの土地の種まきが終った。

冬までには、移ってきた人たちで谷の人口は二千百人ほどにふえた。その間に学校が建ち、町がすえられ、山から切ってきた丸太で野原や庭は垣をめぐらされた。神殿用地が選ばれ、太い丸太やアドーベレンがで10エーカーのとりでが築かれ、丸太小屋やアドーベレンがの家が建った。翌年ブリガム・ヤングとその他二人はウィンター・クォーターズへの道を引き返して、さらに多くの人々を谷へ導いた。モルモンの間には怠惰な者のいる余地がなかった。

アザミやピグウィード、ユタ州の州花となっているセゴ百合の根が、不足な食物をおぎなった。小麦やとうもろこしやじゃがいもは、種をとるためにとっておかねばならなかった。

春には五、六千エーカーの土地を耕して種をまき、6月には豊かな作物が実ったが、その青々とした畑をイナゴが襲った。飢えたイナゴの群れは破壊する悪魔のように実った作物を侵しはじめた。数エーカーの土地に実る穀物に生命をかけた住民は、狂気のようにあらゆる手段をつくしてイナゴと戦った。棒を持ち、シャベルをふるい、ほうきをふりかざし、みぞを掘り、火や水を用いた。しかし、「山から落ちる濁流」のようにイナゴはおしよせてきた。開拓者たちに施すすべはなかった。

しかし、自由を求めて大陸を縦断した信仰厚い人々は、必要な時に見捨てられはしなかった。輪をえがいて鳴きたてる

カモメの大群がやってきて、穀物を食い荒らすイナゴを襲ったのである。カモメは来る日も来る日もイナゴを食い続け、ついに谷にはイナゴがほとんど見られなくなった。

カモメはユタ州の鳥となっている。ソルト・レーク市のテンプル・スクエアには、「モルモンの開拓者にたまわった神の慈悲」をたたえて二羽のカモメの記念碑がある。

その秋にはブリガム・ヤングに導かれて二千五百人以上の人々が谷に到着し、さらに移住の仕事はすすめられた。推定人口は1850年に一万五千、1856年には七万六千人に達した。1847年中には八万五千の移住者が旅をし、1869年には鉄道を利用した。多くの人々は手車を押して全行程を歩き通した。子供や妻、あるいは夫を旅の途中で墓に埋める人々も少なかった。シーズンにおくれて出発し雪に降られた二つの手車隊は悲惨な状態に陥り、五人に一人の割合で合計222人の死者を出した。

塩の湖のそばに入殖した時から、開拓者たちはブリガム・ヤングの靈感に満ちた指導によって、周辺の地域に広まっていった。多くの人々はブリガム・ヤングを、アメリカ史上最大の開拓者に数えている。それらの人々はユタだけでなく、アリゾナ、ネバダ、カリフォルニア、アイダホ、ワイオミング、モンタナ、コロラドなど各州の設立と発展に多大な貢献をした。メキシコからカナダまで、移住者の住む所にはモルモンの影響が及んでいる。

西部を開拓することは容易でなかった。インディアンとの争いを避け、荒野を耕し、河を利用し、かんがい法と乾燥地農業を開発し、家や学校、教会、神殿、道路、工場を建設し、いまだに多い偏見に打ち勝って改宗者を得ることなど。

しかしそれらの仕事は人を強くした。ドリュー知事の言葉通りに、西部における末日聖徒は、その宗教が「現実に耐え抜くか否かを試される」機会を得た。

今や教会員は、西部各州を中心に合衆国全州、カナダ、メキシコ、中部および南アメリカ、ヨーロッパ、日本、オーストラリア、ニュージーランド、太平洋の島々、南アフリカ、近東、極東に二百五十万を数えている。

末日聖徒の礼拝堂は日曜日に人々であふれる。週を通じて、子供のためのプライマリー、若い人のMIA、女性の会、男性の会、家族の人たちの会において、人々はスポーツ、ダンス、ボーイスカウト、夕食会、音楽、ドラマ、スピーチなどのレクリエーション活動を楽しみ、学び、働いている。

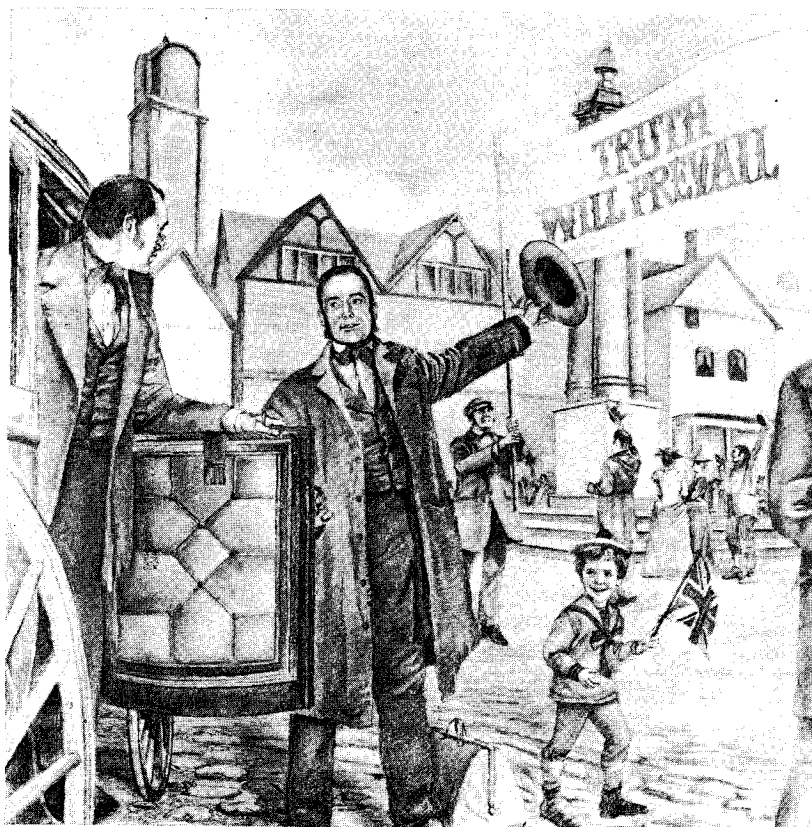
「あなたがたはその実によって彼らを見わけるのである」との救い主の御言葉のごとくに、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員は、宗教に仕事に、科学、芸術、教育、社会奉仕にきわだった働きを為している。

予言者ジョセフ・スミスが西部の地で見た光は、その輝きを今、放っているのである。

特別記事

最初の宣教師の到着

英国が選挙で興奮状態にあった、1837年7月22日、末日聖徒の宣教師7名が英国プレストンにその第一歩をしるした。そして彼らは頭上に翻る、政党の旗に「真理は勝つ」と書かれてあるのを見て喜んだ。この英国における最初の伝道が始められたのは彼らがリバプールに上陸して2日後、また予言者ジョセフ・スミスがオハイオ州カートランドにおいて十二使徒評議員であったヒーバー C. キンボールに向い「ヒーバー兄弟、主のみたまが『わが僕、ヒーバーを英国へつかわし、わが教えを広め、かの国に対する救いの扉を開かしむべし』と私にささやいた。」と語った46日後のことであった。



英国諸島における回復された福音

英国における最初のパプテスマ

宣教師の英国到着後、わずか10日にして9人の改宗者がプレストンのリプル川でパプテスマを受けた。天使の訪れと古代アメリカの予言者たちが書いたという神聖な記録（モルモン経）の回復を宣言する教会に人々は非常な興味をそそられ、その教会へ改宗するヨーロッパ人最初のパプテスマを見ようと、7千人から9千人の大群集が川岸に並んだ。





スコットランドにおける回復された福音

1840年オルソン・プラット長老はスコットランドへ行き、そこですでに働いていた長老たちと同じ業についた。それから主都エジンバラに旅し、聖なる十字架のキリスト像とエジンバラ城の上にある、「アーサー王の腰掛」と呼ばれる、荘厳な、けわしい丘に登った。

その丘の上で、彼は熱烈な祈りを捧げ、200人の改宗者を出せるように主に嘆願したのである。そうして四ヶ月もたたぬうちにエジンバラ、グラスゴー、アングラムでは200人どころかそれをはるかに上回る数の人々が改宗し教会に加わった。その後聖徒たちはこの丘を「プラットの丘」と呼ぶようになった。



ブリガム・ヤングのロンドン訪問

1840年の秋、十二使徒評議員会会長であったブリガム・ヤングはロンドンを訪れ、ここで彼はヒーバー C. キンボール長老、ウィルフォード・ウッドラフ長老、その他の十二使徒評議員の献身的な働きを見た。4年という短期間のうちに、ヤング長老は、彼自身が教会の頭となつて、新しいシオンをめざし、大勢の英国の聖徒を含めた全聖徒を、西方へと導く直接の責任を果たすことになるのである。49年後の1889年、ウッドラフ長老は、教会の大管長に召された。

チャールズ・ディケンズ、モルモン移民船を訪れる

1863年6月4日の暑い朝、ビクトリア王朝時代の作家、チャールズ・ディケンズが、ロンドン埠頭に停泊していたアマゾン号に乗船し、その時の印象を “The Uncommercial Traveler” という彼の本の中に次のように記している。「ここよりほかの場所では、800人もの人々が一致して生活しているのを見たり、彼らの中で、仕事をするに当ってこれほど多くの美、力、能力を見出すのは困難なことであると思う。私は彼らに反ばくするような考えをもちその考えが正しいことを確かめようと乗船した（そう証明されることを固く信じていたのだが）。しかし驚いたことに私の考えは、まったく否定されてしまった。私の性格上偽りを言って正直な証し人のふりをすることはできない。これは真実の証言である。何らかの素晴らしい影響がこのような素晴らしい結果を生じたのである……………」



マッケイ大管長とロンドン神殿

61年前スコットランドに宣教師として召されたことのあるデビッド O. マッケイ大管長は、1958年に再び英国へ行きロンドン神殿を献堂した。それは英国の地に最初の宣教師が第一歩をしるしてから121年目のことであった。この中に入るすべての人の永遠の喜びのためにたてられた神殿は、英国諸島における教会歴史の中で現代という世紀の開幕を告げるものであり、この教会歴史に今後も靈感にみちた章が書き加えられ、書き続けられるのである。





断食と祈り

マリアンヌ C. シャープ

聖 典を学ぶとき、人は断食と祈りの力に驚かされます。ジョセフ F. スミス大管長は次のように言われました。「もし全人類が断食を守ったならば食べ過ぎの罪に対する人々の注意が促がされ、肉体は精神に従属し、聖霊との霊的交わりが増進し、霊の強さと力は確かなものとなる。断食は常に祈りを伴うべきであり、そうする時にこの律法は人を神へと近づけるものである」(福音の教義 第三巻 P. 298)

聖書には、まる三週間の悲しみの後に力と知識がダニエルに与えられたことが示されています。

「すなわち三週間の全く満ちるまでは、うまい物を食べず肉と酒とを口にせず、また身に油を塗らなかつた。すると彼は私に言った。『ダニエルよ、恐れるに及ばない。あなたが悟ろうと心をこめ、あなたの神の前に身を悩ましたその初めの日から、あなたの言葉はすでに聞かれたので、わたしは、あなたの言葉のゆえにきたのです。』」(ダニエル 10:3, 12)

「モーサヤの息子たちの経験から私たちは断食中の靈感された言葉とその力を学ぶことができます。……かれらは非常に熱心に祈りと断食とをしたから「予言のみたま」と「啓示のみたま」とを受け、その教えを宣べるときには神に授かった権能と威勢とによって教えた。」(アルマ 17:3)

信仰の喜びが真の断食の一要素であると考えられ、教義と聖約の中にもこう述べられています。

「……而して汝この日には他に何事をもなすことなかれ。ただ汝が断食を完からしめんため、言い換うれば汝悦びを以て充されんため、真心をこめてその食物を支度することのみを為すべし。誠にこれは断食と祈りにして、言を換えて言えば悦びと祈りなり。」(教義と聖約 59:13~14)

断食日を守ることについていくらか詳しくその概略を述べてみますと、断食の原則は、生きるために個人に残された福音の中の儀式であるように思われます。断食日に何度祈るべきかという問題は各個人に決定を任されています。また、断食日のほかに何度断食すべきかということもまた、各個人が決定すべき問題です。しかし、重病の時、または重大な問題のある時、人は本能的に断食と祈りの中に主を求めるものです。なぜなら聖典は断食と祈りの中に力が得られることを教えているからです。主はすべてのことに命令を下すことはし

ないと言われました。ジョセフ F. スミス大管長は言っています「神は自ら進んでなす人を喜ぶ」と。(説教集, 25:29)

人は断食をする時、喜びをもってしなければなりません。主は言われました。

「……断食をする時には、偽善者がするように、陰気な顔つきをするな。……断食をしていることが人に知れないで、隠れた所においてになるあなたの父に……」(マタイ 6:16, 18)

ジョセフ F. スミス大管長は注釈を加えてこう言っています。「換言すれば、幸福なる者として世に知られるように」(説教集, 25:58)

断食における各個人の自由意志を強調してジョセフ F. スミス大管長はまた次のように言っています。

「……しかし忘れてならないことは、食物と飲物を24時間断って断食日を守るという事が我々にとって絶対的な規則でもなく動かしがたい律法でもなくて、知恵と自由意志を行使する各個人の良心に任されている問題であるという点である。」(福音の教義 第三巻 P.306)

ジョセフ F. スミス大管長は続けてこう言っています。「安息日にはあなたの断食が完全なものとなるように、またあなたが喜びで充されるように、ほかの何事をもなさず、ただ、真心をもって食事の用意をなさい。これこそ主が言われる断食と祈りなのである。」(同上 P. 308)

予言者ジョセフ・スミスは1843年1月17日に次のように書いています。

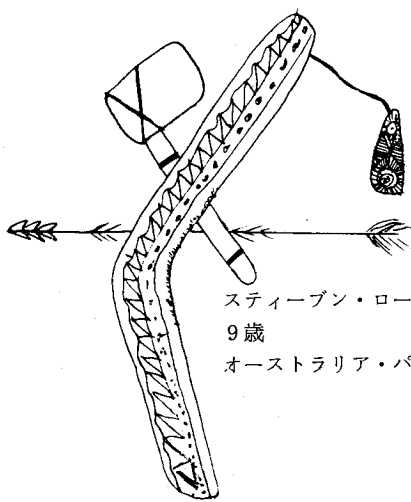
「この時にあたり、この日を屈從の日として、12使徒によって、大いなる神の前に、断食と讃美と祈りと感謝を捧げるように命じられた。……我が再び敵の手から民を救ったので民の間には大いなる喜びがあった。」(教会歴史記録、五巻 P. 252)

断食は、懇願の祈り、喜びの祈り、感謝の祈り、特別の召に対する準備に神の助けを求める祈り、愛の祈り、知識を得、信仰の確立を願う祈り、というように個々人の主に対する深い、心からの感情を表現するものです。

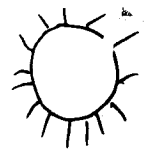
断食と祈りの中には喜びが見出されます。断食と祈りの中に偉大な力が体験され、主によって、すべての者に霊的な強さと内なる光が祝福として与えられるのです。

子供のページ

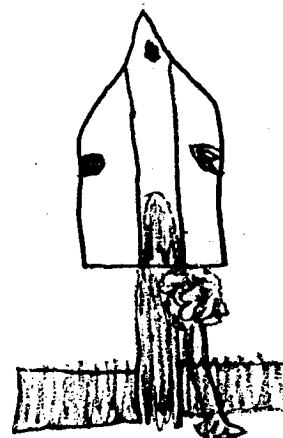
せかいじゅうの子どもたちのえをみるのは、たのしいですね。
みんな、とてもじょうずにかけています。



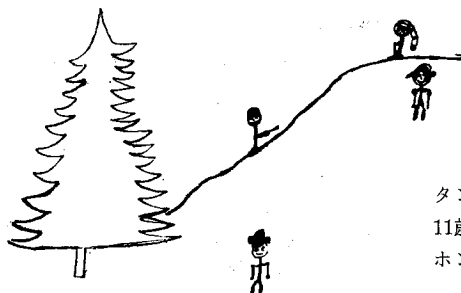
スティープン・ローソン
9歳
オーストラリア・パース



ユエン・スー・チン
10歳
ホンコン,
シャム スイポー



マルコ・タルアッチア
10歳
イタリア・フィレンツェ



デボラ・エリオット
7歳
カナダ・ケベック

タン・ポー・チン
11歳
ホンコン, シャム
スイ ポー



ソー・イエン・チュン
10歳
ホンコン



ジャニス・エリオット
8歳
カナダ・ケベック



獅子の如く 勇敢に

マージェリイ S. キャノン

ローリン G. ウイルキンソン

ジョセフはレベッカ・パーキンスが彼のお母さんに話しかける声を聞くまでは、ドアの所にいるのがストーン先生だとばかり思っていました。

「焼きたてのはちみつ入りのパンを少し持ってきましたよ。ルーシー」

「本当にありがとう。レベッカ」

「何かのたしになると思って。」

ジョセフはそれが助けになることを知っていました。お母さんは、ジョセフやほかの子供たちの看病で疲れきっていました。彼らはみなチフスにかかっていた。ソフロニアは90日もの長い間病気で、死にかけたほどでした。

「ジョセフ坊やはまだ良くないようねえ」と言うパーキンス夫人の声が聞えます。

「ええ、この数週間本当にひどかったんですよ。チフスの熱で肩の所にはれものができてしまってね。ストーン先生がそれを切開して下さいました。わき腹や足までつきさすように痛みがひどいらしいんですよ。先生は、他のところへ伝染しないようにと切開して悪い部分を取りのぞいて下さったんですが、まだとても赤くはれていて……」

「こういう場合、どうしたらいいのか、外科専門のお医者さんに来ていただいて相談しようと思って、今待っているところなんですよ。」とお父さんの説明している声が聞えてきます。

待っている？もうこんなに長い間待っているのに、とジョセフは思いました。皆ができる限りのことをしてくれているのをジョセフは知っていました。兄のハイラムでさえ、痛みがやわらぐようと、昼も夜もジョセフの足をさざえてくれました。しかし、足の痛みは少しも楽になりません。ジョセフはやけになって叫びました。「お父さん、どうすればいいの。どうしたらがまんできるの。」この叫び声と同時に、父親のジョセフを呼ぶ声がしました。「お医者様が見えたよ！」

ルーシーがお医者さんを別の部屋に通すと、レベッカは「おだいじに」と言い、いそいで帰って行きました。

「先生、息子の足を救うためには、どうすればいいんでしょうか。」しばらくの間、誰も答える者がありませんでした。やがて外科医の一人がやさしくこう言いました。「残念ですが……我々にはどうすることもできません。息子さんの脚はなおりそうもありません。命を救うためには脚を切らなければなりません。」のどからこみ上げてくる泣き声を押し殺そうとするように、ルーシーは、自分の口を手でおおいました。

「切るなんて！そんな……ジョセフがかわいそうです！」それから彼女は、ソフロニアが死ぬとお医者さんに言われた時のことを思い出しました。



死はすぐそばまでやってきていたのに、その死さえも歩みをとめたのです。ソフロニアのために、彼らは祈り、奇蹟を願いました。その願いは聞きとどけられ、まさに奇蹟が起こったのでした。ジョセフのお母さんは、両手で頭をかかえ、もう一つの奇蹟を願って祈りました。

祈りを終えて頭を上げると、彼女は静かにこう言いました。

「ストーン先生、なんとか、もう一度やってみて下さいませんか。もう一度ためしてみるまでは、ジョセフの脚を切らないで下さい。」相談の結果、お医者さんたちは足を切らずに病毒におかされた骨を切り取ることに決めました。彼らがこれからやる事をジョセフに話している間に、ルーシーはジョセフの脚の下部をくるむために、清けつなホームスパンのシーツを取りに行きました。その当時は、痛みを消すすい薬がなかったので、お医者さんはお母さんと呼んで「つなを何本か持って来て下さい。ベッドにしばりつけますから。それからブランデーかブドウ酒を少し、痛くてとてもがまんできないでしょうから。」と言いました。

しかしジョセフはそれをいやだと言いました。彼はどんなお酒も飲みたくなかったし、ベッドにしばりつけられたくもなかったのです。

「お母さんは部屋から出ていて下さい。お父さんにそばにいてもらいますから。お母さんはよくを何度もおぶってくれたり、長い間看病してとても疲れているでしょう。」そう言うジョセフの目には涙があふれていました。

「お父さん、ベッドの側に座って、しっかりぼくを抱いててほしいんだ。そうしたらよく、骨を切り取られたって、がまんするよ。」

お医者さんの一人は「この子はまだ小さい。手術をするには、何か助けが必要だ！」と言って反対しました。

ジョセフはうでをのばして、お父さんの手をつかみ、自分のベッドの横にこの大きなお父さんを引っぱって座らせました。「イエスキスがきっと助けて下さるよ。ぼくががんばることも」

これを聞いてりっぱな、様々な困難を切り抜けてきたジョセフのお父さんは自分の腕を幼ない息子にまわして、しっかりと胸に抱きました。

手術が始まりました。時間は刻々と過ぎ、痛みを消す薬もなくそこにあるのは息子の手足を押える力強い父親の腕だけでした。ジョセフの悲鳴を聞きつけたお母さんが手術をしている部屋にかけもどって来ました。

「ああ、お母さん、帰って、帰ってちょうだい！ 入ってほしくないんだ。お母さんがあっちへ行ってくれたら、ぼくががんばって骨を取ってもらうよ……」とジョセフは泣きながら言いました。

すい薬も何も使わない原始的な手術が終った時、ルーシーはくちびるがふるえ、愛する夫に手術の結果をたずねることもできずに、部屋のドアの所に立ちすくんでいました。お父さんは息子の肩をやさしくささえながらルーシーの方を見てもう片方の手をさしのべました。

ルーシーは部屋を横切り、夫の片方の腕を自分の体に巻きつけるようにして、ジョセフのベッドのそばにひざまずきま

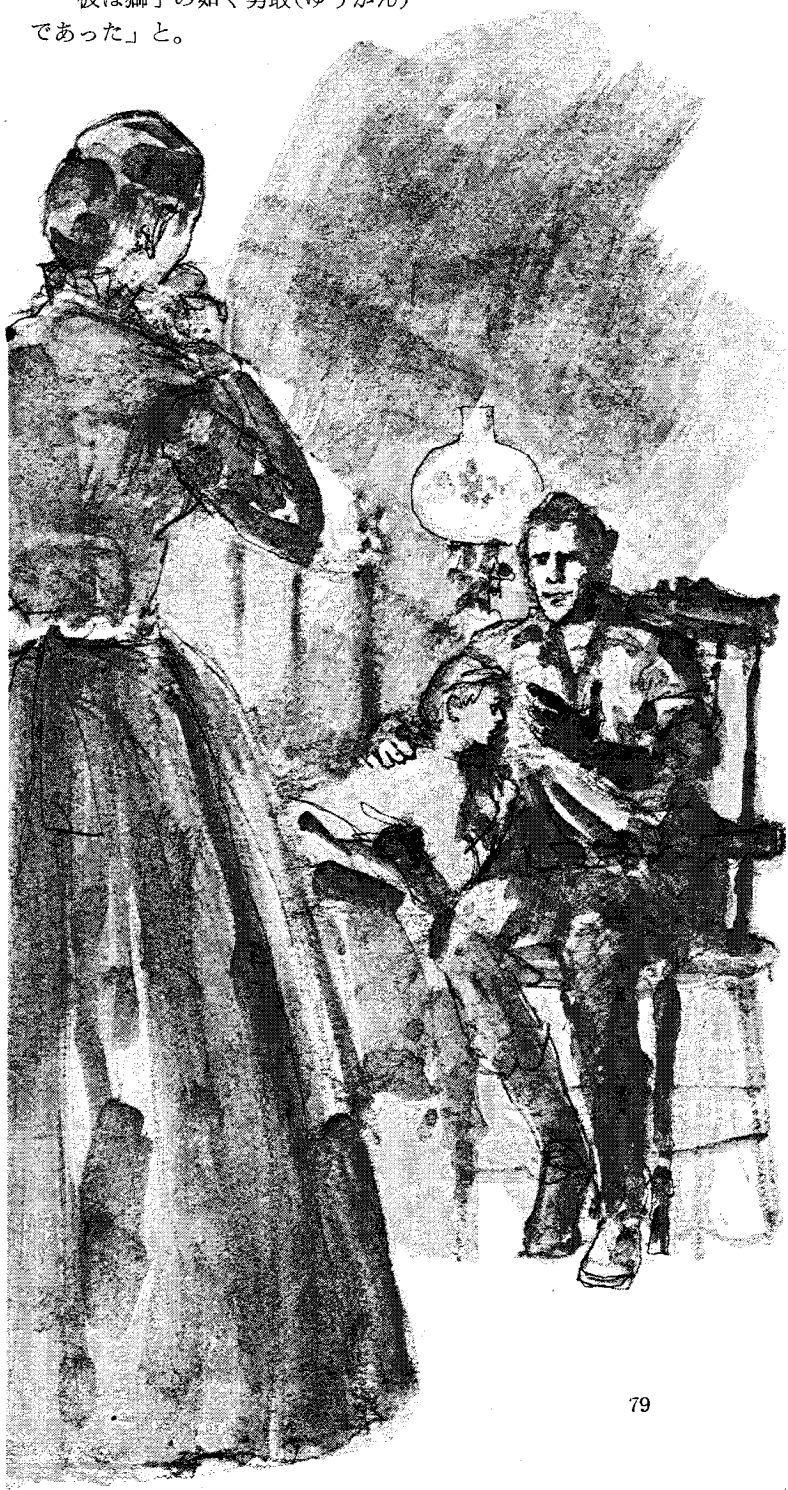
した。その時のジョセフは小さく、青くそして何て静かにみえたことでしょう。つかれきったやみの中から、ジョセフはお母さんの足音を聞き、やさしく、しかしためらいがちにほほをさわるのを感じて、目を開けました。ジョセフの青いひとみがしっかりとお母さんを見つめたとき、お母さんの顔から不安の影が一ぺんに吹き飛んでしまいました。

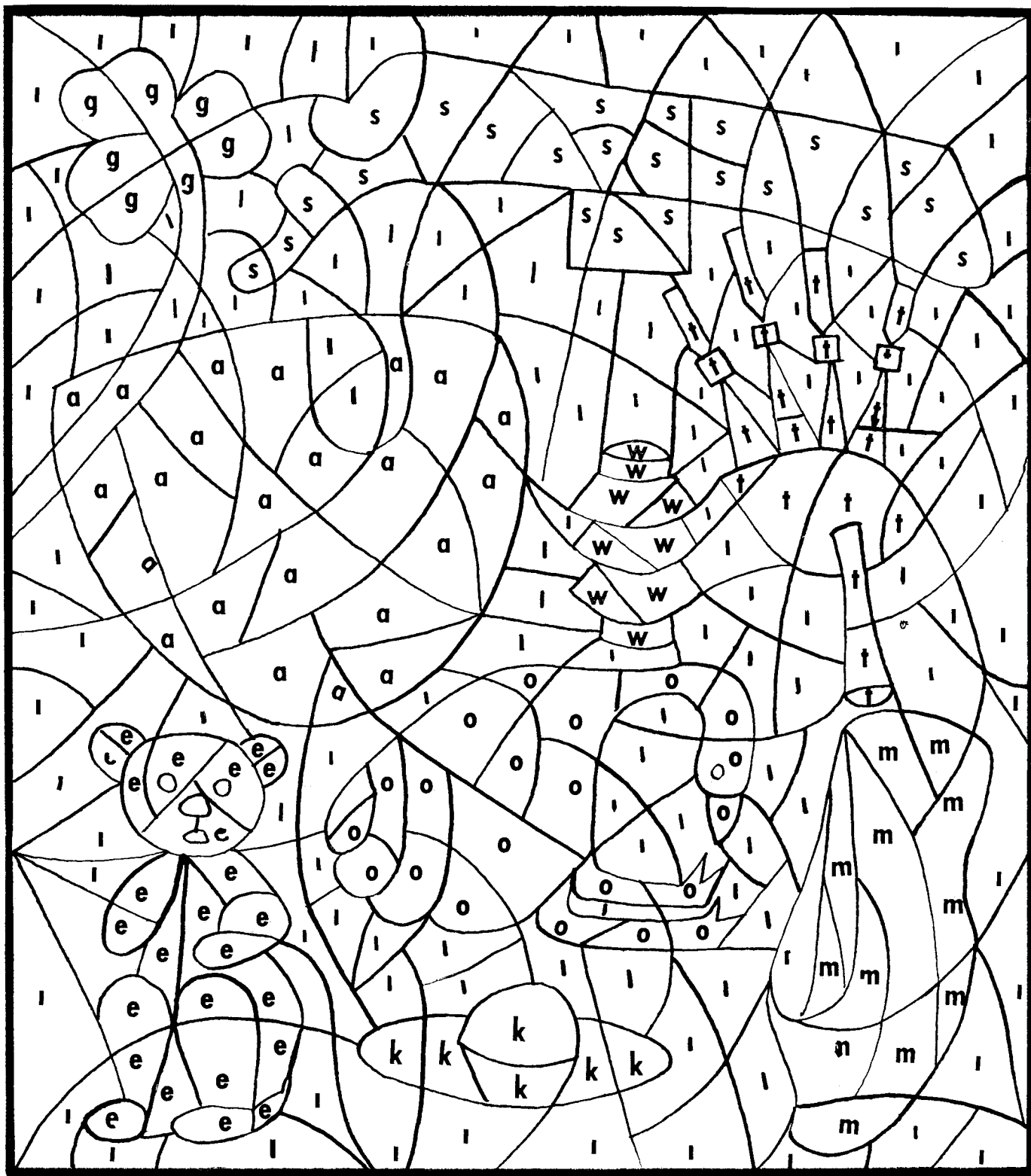
ストーン先生は、ひたいの汗をふきながら、満足そうにならずきました。手術は成功したのです。

少年ジョセフは、主が彼と共にあったことを知っていました。彼らの祈りに主が答えられたのです。彼の脚はいやされました。

ジョセフの生涯を通して、この時の彼を人々はこう言うでしょう。

「彼は獅子の如く勇敢(ゆうかん)であった」と。





それはなんですか？

そして、どこからきたのですか？

マ ー ラ ・ ケ イ

このえの中に、いろいろなくにからきた9つのものが、かくされています。
 (g)とかいてあるところをみどりいろでぬり、(s)はちゃいろ、(t)はむらさきいろ、(a)はみずいろ、(w)はだいいいろ、(e)はちゃいろ、(o)はきいろ、(k)はあか、(m)はみどりでぬってください。ぜんぶぬりおわりましたか？ それでは、9つのものがどこのくにのものかいますか？

《こたえ》 アイルランドの国花・みやまかたばみ。イタリアの Gondola。アラスカのエスキモーのいえ。日本のちょうちん。スコットランドのバグパイプ(ふえ)。オーストラリアのコアラぐま。アフリカのだちょう。メキシコのソブレロ(ぼうし)。オランダのきぐつ。



日曜学校

聖書のような深遠で難解な本を9歳、10歳児の愛読書にさせることは、どんな教師にとっても一つの挑戦である。しかしその仕事に心と思いを尽くす教師は聖書を子供の心の友とすることができる。

聖書は心の友

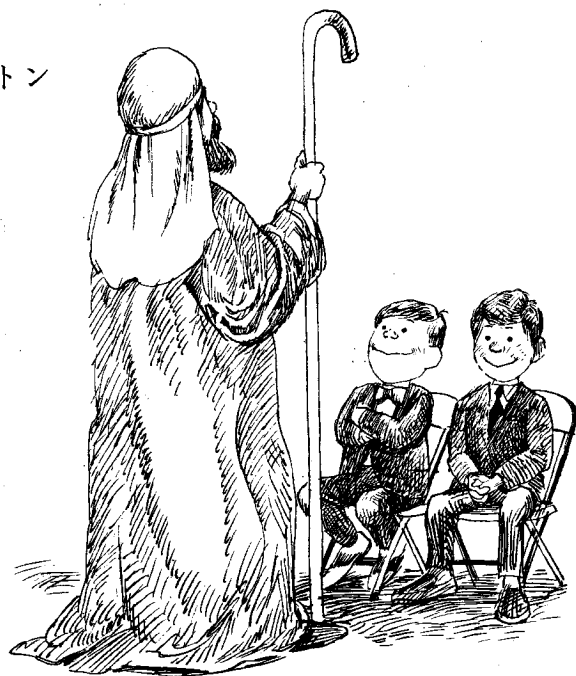
ジュエル B. エルキングストン

教 師用手引きのはじめのところで述べたように、私は教師として生徒に対し次の三つの重要な義務を果すように努めている。

1. 興味あること
2. 説得力のあること
3. 熱心であること

以上の三点に留意しながら、レッスンの準備をすると大変うまくいく。私の証が強く、そのクラスを教えることは特権であり良い機会だと感じていたとしても、生徒の関心を向けさせ意義あるレッスンをするためには、よく勉強し祈る必要があることを私は知った。最大の努力をしてこそ最大の靈感を受けることができるのである。

「聖書…神聖な記録」のレッスンをすることは本当に大きなチャレンジであった。聖書のような深遠で難解な記録を元氣な9歳、10歳児のクラスにどのように意味深く説明するかというチャレンジである。私は聖書のような大きな本の全領域に手を伸ばすよりは、その中の特に目立った大切な事柄を生徒に教え、一人の人物でもよいからこれを生徒に覚えさせるのがむしろ一番よい方法ではないかと考えた。そしてそうすることによって、子供達が今後進んで聖書を読もうとする



動機にしようと思った。大きな器いっぱいのアイス・クリームで生徒をうんざりさせるよりも、ちょっと味みさせ、そのおいしさを知らせて、さらにそれをもっと欲しいという気持ちにさせたいと思った。

私はクラスの一部の生徒に次のような仕事を割り当てた。まず第一に、一人の生徒にイエスについての概略的な話をするように頼み、それから三人の子供に、彼らにしてほしいことを短い手紙に書いて渡した。（この年令の子供は電話よりも手紙を受け取ることの方を喜ぶ。）

その内容は――

1. 聖書（バイブル）という語の意味を調べて下さい。

聖書の二つの部分の名称はなぜそうになっていますか。

2. 「箴言」の中から好きな一文を選んで下さい。

3. 旧約聖書の中の一番好きな人物を選んで下さい。聖書

でその人物について読み、クラスで再びその物語を話せるように準備して下さい。

最後に、聖書のレッスンを生き生きとしたものにするために、私はモーセ自身にクラスに来て話をしてもらう手配をした。

これは一人の男性の協力によって実現された。彼は古い毛布を上着代わりに着、麻布を頭にかぶり、黒っぽい布を下着代わりに着、杖（庭にあった大きな棒）を手に持った。もちろん白い髭を長く垂らすことも忘れずに。

授業時間の中頃、このモーセはドアをノックし、中に招かれて入った。子供たちの顔に浮かぶ驚きと喜びの表情、彼の話を心に聞いている子供たちを見ると、私が準備した苦労は一度に吹き飛び、励ましとなる程であった。

このモーセは、神の命令に従って進んだ彼の生涯の出来事

のいくつかを、しみじみとして真に迫った演技をもって語った。彼はどのようにして主がモーセに十戒をお与えになったかを説明した。それから生徒と一緒に十戒を読みいくつか強調したい箇所のうち特に第五番目の両親と天父に敬い従うことの重要性を強調した。

聖書の中の重要事件を子供たちに覚えさせ印象づけるために、私は彼らにいくつかの物を渡し、家に持って帰り、揭示するか、スクラップ・ブックに貼るようにさせた。それらの物とは、装飾印刷された十戒のカード、石板を割っているモーセの小さな絵、聖書に含まれている書名が印刷されたしおり、八福の教えのチャート、山上の垂訓の小さな絵などである。

もちろん聖書の中の他の人物にクラスを訪問させてもよい。ただこのような企画は時々しか組めない。しかし上手になされたならば、聖書を生き生きとしたものとなし、クラスの生徒にそれらの偉大な人々を単に聖書の中の人物としてではなく、現実的な人物として考えさせる助けになるであろう。一番大切なことは、生徒の心に聖書を読み、その中の偉大な真理を学びたいという熱意をかき立てることである。

今月の前奏曲

Robert Cundick



7月の聖句

大人日曜学校

心の清い人たちは、さいわいである。彼らは神を見るであろう。（マタイ 5:8）

子供日曜学校

わたくしは主が命じたもうたことを行って行なう。（I エニーフアイ 3:7）

悔い改めについて

管理監督

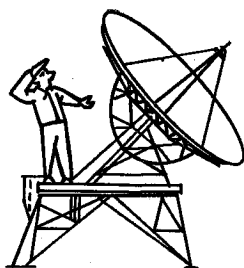
ジョン H. バンデンバーグ

最 近の宇宙計画における進歩は、人類の知性の偉業である。たとえば、アポロ 8 号、10 号計画は偉大な科学的成功であった。これに加えて、この科学的成功は我々個人の生活に適用し得る大きな教訓を提供している。その教訓の一つは、中間軌道計画と呼ばれる宇宙誘導における重要な部分に含まれている。アポロ宇宙船が発射された直後、宇宙船上の計器と地上管制センターの計器が、現在の進路を測定し、また現在の進路と、目標地点に到着するためにとらなければならない進路との比較が始められた。

我々は宇宙船の誘導計器に類似した「たまもの」を持っていて、正義の道から逸脱する時、それを、我々につけてくれる。

ニーファイ人の予言者、モルモンはこの「誘導」の方法について説明し、こう言っている。「……あなたたちは善悪を判断する自由と権利を与えられているばかりでなく、その判断の方法は真昼と暗夜とを区別するように過りなく完全に知れるほど明らかである。すべての人々はみな善悪の区別を弁えるためにキリストの「みたま」を授かる……」（モロナイ 7：15～16）

地上にアポロを追跡する飛行管制基地があると同じように、我々には生活の進路を正してくれる基地がある。この基地には、両親、監督、定員会会長会、ホーム・ティーチャー、定員会指導教師、教師などが含まれている。これらの人々は、我々が昇栄への道を歩み続けることができるよう、生活の中に効果的に配置されている。昇栄への道からのほんのわずかな逸脱も見逃されてはならない。直ちにもとの軌道に乗せなければならない。我々が生活するには、キリストの「みたま」の励ましに敏感であることが必要である。



我々にはしっかりと生活の進路を正してくれる基地がある

これに加え、我々の成功を願っている両親、指導者の助言に耳を傾けることが必要である。我々が少しでも正義の道から逸脱したのを発見した時、中間軌道計画、すなわち過失を正す方法を、主は贖罪を通して用意して下さっている。我々はこの過程を悔い改めと呼ぶのである。これによって生活は改善され我々の目的である永遠の生命への道を歩み続けることができるのである。

我々は特に小さな逸脱と思われることに気をつけなければならない。なぜなら、これら小さな逸脱といわれるものが、我々の使命のすべてを失敗させることができるからである。主は言われた。「すなわち、主なるわれは罪を見ていささかもこれを許すを得ざればなり」(教義と聖約 1:31)

主がこのような言われているのは、昇栄へ至る道からのほんのわずかな逸脱さえも我々にとっては大きな損失となることを御存知だからである。我々は生活上のいかなる罪も過失も許すべきではない。昇栄への道に位置しているかどうかをたえず評価して、必要な時、中間軌道計画により自分自身の罪を悔い改め、元の正しい道に生活をもどす必要がある。

主が我々に与えて下さった偉大な祝福の一つに生活を正しい方向に向けていく力がある。主の贖罪によってのみ、これが可能となるのである。主は、我々が悔い改めを通してもとの正しい生活にもどれるようにして下さっている。それゆえ正義の道からの逸脱から起こる永遠の結果に我々は苦しむ必要がないのである。

中間軌道計画を達成するために必要な段階をふまねばならぬと同様、悔い改めを有効なものとするためには、一定の条件をみたさねばならない。

真の悔い改めの第一条件は、自分の罪や過失を自覚することである。マッケイ大管長は、こう言っている。「自分自身の罪を悟らない人にどんな進歩があるだろうか。」このような人は、現在自分がある状態より、もっと成長した、もっと良い、もっと望ましい状態があるという認識——これが成長の根本的な要素なのであるが——を失っているのである。自己満足という土じょうの中では、滋養物が乏しく真の成長はできない。その根は不平不満の中に援助を求めるようになる。『天は己の罪を悟らざる者を哀れむ。』(マタイ 5:23-24)

第二に、罪を悲しむ気持ちがなければならない。それも単に

後悔するというのではなく、心から悲しむ気持ちがなければならない。使徒パウロはこのような悲しみを「神のみ心にそった悲しみ」と表現している。彼は悔い改めたコリントの聖徒にあてた手紙の中で次のように言っている。

「今は喜んでいる。それはあなたがたが悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めるに至ったからである。あなたがたがそのように悲しんだのは、神のみところにそうたことであって、わたしたちからはなんの損害も受けなかったのである。神のみところにそうた悲しみは、悔いのない救を得させる悔い改めに導き、この世の悲しみは死をきたらせる。」(Ⅱコリント 7:9-10)

第三に、我々が悪い行ないをしたと知ってそのことを真に悲しむ時、その為した行ないを告白することである。

主は言われた。「人罪を悔い改めしや否やは、見よ、彼は自らこれを告白しその罪を捨つべければ、その悔い改めたことはこれによりて知るを得べし。」(教義と聖約 58:43)

では、だれに対して自分の罪を告白すべきであろうか。教義と聖約はこうのべている。

「……主なるわれは死に当るべき罪を犯さずしてわが前に罪を告白し、赦しをわれに乞う者にはその罪を赦すなり」(教義と聖約 64:7)

この聖句から我々は主に向って自分の罪を告白すべきことを知る。重大な罪を犯した者は「イスラエルの判士」である監督にも、その罪を告白すべきである。

第四に、我々がなした悪から遠ざかるために最大の努力を払わなければならない。悔い改めは、我々が不当に扱った人々と和解してこそ意義あるものとなるのである。

「だから、祭壇に供え物をささげようとする場合、兄弟が自分に対して何かうらみをいだいていることを、そこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に残しておき、まず行ってその兄弟と和解し、それから帰って来て、供え物をささげることになさい。」(マタイ 5:23-24)

第五に、我々は昇栄への道を歩み続けるべきである。中間軌道計画、すなわち、過ちを正す方法により正しい道にもどり、二度と同じ過失を繰り返すべきではない。我々の究極の目的である昇栄へ至るためにたえず思いと行ないに注意を払い必要に応じて我々の生活を正しい道にもどすために悔い改めをなすべきである。



私が持ちたかった五つの思い出

ある大学生

(1926年のエラ誌に、父親に望むこととして、大学四年生の告白文が掲載されました。当時の青年の父親に対する望みがそっくりそのまま今日の青年にもあてはまるように思われます。)

1. 両親は私たちにお金をくれたり、どこかに行く場合いつもいろいろ用意をしてくれるのですが、一緒に出かけることもなく、たいてい家に残って仕事をしているので遊びに出かける私たちが何か罪の意識を感じてしまいます。それより、両親が子供の仲間入りをして一緒に楽しんだサーカスでの一日や、峡谷旅行の一日を思い出すことができればよいのと思います。

2. あかりの側に坐っていつもじっと新聞を読んでいる父親よりも、私たちと一緒に歌ったり、本を読んだり、ふざけ合ったりする夕べの一時を思い出すことができればよいのと思います。

3. 毎朝、一日の仕事の予定を発表するだけの父親ではなくて、一ヶ月か一週間、一日でもいい、私たちと一緒に農場の仕事の計画をたてて、単調な仕事の中から大きな仕事をなしたという父親を思い出すことができればよいのと思います。

4. 私たちが朝教会に行っている間は家に残り、午後になると私たちを家に残して母と出かける父親ではなく、四輪馬車に私たちみんなをさっさと詰め込んで、父親と一緒に教会

へ連れて行かれた日曜日を思い出すことができればよいのと思います。

5. 成長期にある少年を悩ませる問題や事実について討論している時に、私が事実をまちがってとらえるままにしておいたり、問題解決を私だけの力にまかせておくのではなく、光と慰めを与えてくれる父親の聞かせてくれた確かな、力強い見解を一言でも思い出すことができればよいのと思います。

しかし実際、私の良心はこのように父を非難する私自身を恥じて泣きたい位なのです。なぜなら、私の父ほど家族に献身的であり、家族の幸福を切望し、家族の者の成功を誇りに思っていた人はいなかったからです。父の模範は私たちにとってたえず「かがり火」となってきました。本当に残念なことなのですが、父は、私たちが「父」を必要としていることを知らなかったのです。

父が残してくれる土地よりも、私たちはむしろ父親の愛、父親と親しく交わることを求めているという事実を父は知らなかったのです。そして多分いつの日にか私たちは自分の力でお金を得ることができるようになるでしょうが、人生を豊かに美しく、富んだものとしてくれる思い出は決して作ることができないということを父は知らなかったのです。父親と子供たちが連れだって散歩する光景を見る時、私の胸はいつも一杯になってしまうのです。

十の力

私 彼に会ったのは、朝鮮戦争中、第3歩兵師団、第15連隊の末日聖徒イエス・キリスト教会の会員によって開かれた聖餐会の時だけです。前線のざんごうの中にぎっしりと15人程入りました。我々は各自の水筒のふたと配給されたクラッカーを使って祝福し聖餐に与りました。その日が第一安息日だったので我々はその後証会に移りました。

彼はアイダホ出身のスチュワート軍曹ですと簡単に自己紹介をしてから、先月どんなに豊かな主の祝福が彼の上にあったかを語り始めました。彼は背が低く、1メートル50～60センチで体重は72キロぐらい、そして腕と肩が強そうなのがわかりました。

彼の子供の時から大きな望みは立派なスポーツマンになることだったと話しました。指導員たちは、チーム・スポーツをするには彼が小さすぎると考えて、個人競技に専念させ、レスラーとして、また長距離ランナーとして彼はかなりの成功を収めたのでした。彼は一等兵として朝鮮に来ましたが、10カ月の後に軍曹となったのです。そして我々は彼がその階級を受けるに足る人物であることが間もなくわかりました。

スチュワート軍曹の証は、彼の中隊の司令官で彼の表現によれば巨人であるジャクソン中尉のことに移って行きました。ジャクソン中尉は身長2メートル、体重が実に111キロという堂々たる体格の持ち主で、大学時代優れたスポーツマンだったとのこと。軍曹は目を輝やかせて、余りに誇張しすぎると感じさせるような言葉づかいでジャクソン中尉は全アメリカ歩兵隊中最も勇敢で、最も厳しく、偉大な中隊長であるとのべ、自分の部下に何かをする様にと頼まない人はむしろ自分から進んでやろうとはしない人だとも言いました。非常な誇りをもって、彼はさらにジャクソン中尉は男の中の男であり、素晴らしい将校であり、キリストを信じる紳士であり、彼の指揮下におかれる者たちは皆大きなよろこびを感じていると話しました。

スチュワート軍曹は、この聖餐会の二、三日前に巡回の仕

事を割り当てられました。統卒者はジャクソン中尉でパトロールの先兵をつとめたのも彼でした。菱形をした急勾配の丘をおる時にしんがりをつとめたのが軍曹でした。丘のふもとに近づいた時、パトロール隊は敵の狙撃兵の伏兵にあり、先頭にいた中尉は自動小銃でわき腹を蜂の巣のようにされてしまったのです。彼は倒れてもなお、身体をひきずって、岩と木の陰に身をかくし、その間にパトロール隊の残りの者は丘の上によじのぼって再び一団となりました。スチュワート軍曹は、中尉の次位にあったのでパトロールの責任が彼の双肩にかかってきました。彼は部下に直ちに半月形の防御線を作らせ、部下の中から最も大きく力も強そうに見える一人を選んで中尉を救助するために丘を下って行かせました。ほかの者たちは彼を援護する準備をしました。出かけて約30分ほどして、彼はそのまま帰って来て、負傷した中尉を動かすことができなかったと報告しました。中尉は重すぎたのです。まるで死んだ馬を持ち上げようとするようなものでした。彼はほかの誰よりも先に自分が中尉の所に行けと命じられたことで不平を言い始めました。誰かが「中尉のことは忘れよう。結局彼はただの黒人なのさ。」と言うのが聞えました。この瞬間スチュワート軍曹は部下の方を振り向き、彼の身長が2メートルにもなったかと思われる程ぐっと背を伸ばして重大なことを話す口調でこう言いました。

「中尉の肌の色が黒いか緑色か、そんなことは問題じゃない。我々は彼を置き去りにして行くことはできない。我々の中の誰かが同じ立場に置かれたら、中尉はその者を置き去りにはしないだろう。それに、彼は我々の司令官でもあるし、私は彼を肉身の兄弟同様に愛しているのだ。」

少しの間沈黙があり、それから軍曹は伍長の一人に近づき静かな、しかし、非常に威厳のある態度で、「君が指揮をとり我々を待つように。私が中尉を連れて来よう」と言いました。

注意深くできるだけ音を立てずに、軍曹は散在する狙撃兵の銃火の中を中尉のいる方向へと、少しずつ進んで行きまし

ベン F. モータンサン

た。軍曹が遂に彼の所に着いた時、ジャクソン中尉は大量の出血で衰弱しており、事態は絶望的で前線応急手当所に自分を連れ戻す方法はないだろうと言いました。その時、スチュワート軍曹の天父なる神に対する偉大な信仰が彼を助けてくれたのです。自分のヘルメットを取り、倒れている指揮官の傍にひざまづいて軍曹は言いました。「中尉、私と一緒に祈って下さい。」

この証会で我々は非常な感動を受けました。我々は戦場における一つの偉大なドラマを目撃したように思いました。今日の世界に非常に欠けている、神に対する愛と兄弟愛の神聖なドラマが我々全員の目前で行なわれたのです。語るにつれて軍曹のほおに涙があふれ落ち、我々も彼と共に声もなく泣きました。彼はその時の祈りの言葉を全部覚えてはいませんでした。それから、彼はこれまで一度もタバコを吸ったことがなかったのを思い出しました。酒類もそれがどんな形で用いられていたにせよ決して口にはしませんでした。

ここで、彼の話は少しの間脇道にそれて、彼がタバコと酒類を断ったのは、宗教上の信念からだけではなく、スポーツマンになるという自分の希望を達成するために強く健康な肉体を得たいと願ったからでもあると説明しました。

しかし、この日祈りの中で天父なる神と交わった時に、彼は疑いもなく、なぜ自分の若い人生を通して知恵の言葉に忠実に生きて来たのかを理解したのでした。

「愛する主よ」と彼は嘆願しました。「私には強さが——私の肉体の能力をはるかに超えた強さが必要です。あなたの息子でもある、この偉大な男が、ひどい傷を受けて私の横に倒れています。彼はすぐに手当てを受けねばなりません。私は彼の生命を救うために、治療を受けられる救護所まで、彼をこの丘から運び上げることが必要なのです。天父なる神よ私はあなたが、心と手が汚れなく、清らかな者に十の強さを与えるとお約束なさったことを知っています。私にはその資格があると感じています。愛する主よ、どうぞ、私にこの祝福をお与え下さい。」



私は指揮官を抱き上げ、肩にかついだ

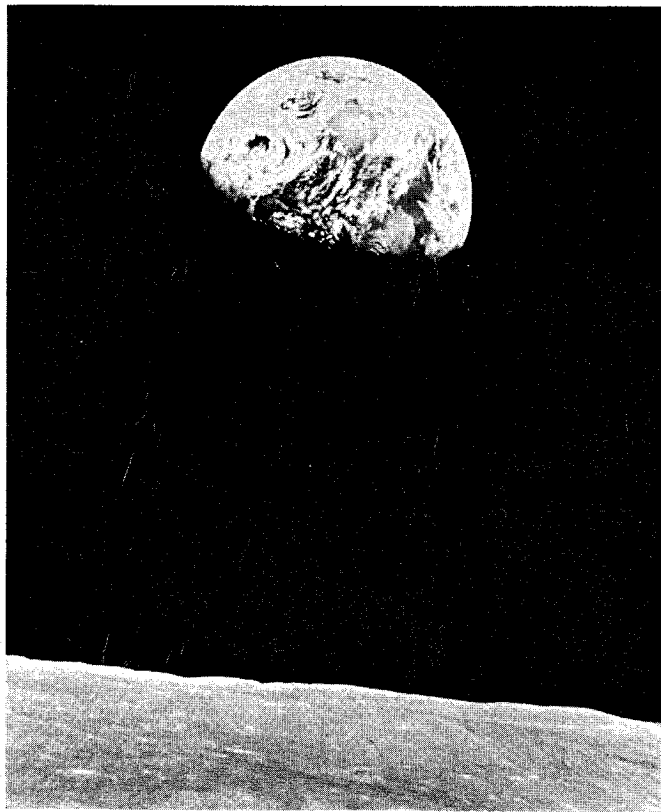
絵 ジェリー・ハーストン

「兄弟たちよ」と彼は続けました。「私がこう祈った時、私の筋肉に力が満ち溢れるのを感じ、その瞬間私はこれまでに一度も体験したことのないことを——神様が本当に信仰深い子供たちの祈りを聞き、そして答えて下さるということを知ったのでした。私はへりくだって神に感謝をし、アーメンと言ってヘルメットをかぶり、かがんで静かに中隊長を自分の肩ののせました。

私への感謝と激励の言葉をささやきながらジャクソン中尉は静かに泣いていました。」

私はスチュワート軍曹に一度会っただけです。二時間にもみたくない時間でしたが彼の中隊にいたということは我々にとって大きな恵みでした。私はざんごうの中に座って選ばれた若者に耳を傾けている時、偉大なるものの存在を感じることができました。彼の魂が私の魂に触れ、そして私の信仰は、彼のキリストのような態度と、天父なる神の愛、そして全人類への兄弟愛に関する感動的な彼の証によって、火のように燃えたのでした。

※ベン F. モータンサンは朝鮮戦争中、従軍牧師として働いていた。



月旅行と 地球への メッセージ

G. ホーマー ダーラム博士

(アリゾナ州立大学総長)

1968年12月27日金曜日朝、アメリカの宇宙船アポロ8号は人類初の月旅行に成功し、無事太平洋に着水した。合衆国空軍フランス・ボーマン大佐、合衆国海軍ジェームス A. ラベル大佐、合衆国空軍ウィリアム A. アンダース少佐の三人は、1968年12月24日、月を10周して、歴史的な宇宙飛行を遂げた。彼らは12月12日土曜日、フロリダ州ケープ・ケネディから出発したのであった。

1968年のクリスマスイヴは、3人の宇宙飛行士からの特別

なクリスマスメッセージを月の軌道から直接テレビやラジオを通じて聞いた何百万の人々の記憶と歴史に深く刻みつけられたのである。そのメッセージは、地球に住む人々にこの上もないものであった。それは次のようなものであった。(創世記より)

アンダース少佐：「はじめに神は天と地とを創造された。地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。神は「光あれ」と言われた。すると光があった。神はその光を見て、良しとされた。神はその光とやみとを分けられた」

ラベル大佐：「神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕となり、また朝となった。第一日である。神はまた言われた、「おおぞらがあれ……」そのようになった。神はおおぞらを造って、おおぞらの下の水とおおぞらの上の水とを分けられた。神はそのおおぞらを天と名づけられた。夕となり、また朝となった。第二日である」

ボーマン大佐：「神はまた言われた、天の下の水は一つ所に集まり、かわいた地が現れよ」。そのようになった。神はそのかわいた地を陸と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神は見て、良しとされた」(創世記1:1～10参照)

宇宙船から送電されて来た地球のテレビ実況放送を見て、またボーマン大佐による月の説明を聞いた人々にとって、三人の宇宙飛行士の話したこの古えの言葉の意味がさらに強く印象づけられたのである。

そして、ボーマン大佐の放送終了の合図があった。

「アポロ8号より、おやすみなさい。神がすばらしい地球にいる皆さんを祝福されますように」

12月24日早朝、アポロ8号が月軌道に突入して5時間後、ボーマン大佐はテキサス州リーグ市にある聖クリフトファー監督派教会宛へ祈りを送って来た。ボーマン大佐は、その教会で礼拝式を行うことを許されている信者なのである。彼はユーモアをまじえて、「今晚、礼拝式を行う責任がありますがどうも果たせそうにありません」と言ってきた。彼の言うには、その祈りは、聖クリストファー教会に集まった人々だけでなく「あらゆる人」に捧げるものということであった。それをここに記そう。

「神よ、不完全な我々に、世に示されている汝の愛を見せたまえ」

「無知で弱き我々に、神を信頼する信仰を与えたまえ」

「汝は理解して、汝に祈りを捧げ続けることのできる知恵を与え、来るべき世界平和に我々のなすべきことを教えたまえ」

これからの月旅行はまた行なわれるであろう。高さ110kmの軌道から見た荒涼とした月よりも、もっと詳細な報告が述べられるであろう。月やもっと遠くの星からのメッセージが届くであろう。けれども、信仰をもち、その意味を深く知る者は、ほとんどいないであろう。

「来るべき世界平和に我々のなすべきことを教えたまえ」

権威の尊重と福音

スターリング R. プロボスト

新

聞、雑誌、テレビ、ラジオなど、あらゆるマス・メディアは、暴動、騒動、反逆、法に対する反抗などの話であふれている。それらの話は特定の年代に限られたことではない。

暴動の余波は手に負えないほどに各地に広がり、多くの人々はそのありさまをあっけにとられて見るだけで、その勢いを抑制するすべを知らない。では、福音は法とその秩序についてどう言っているのだろうか。

律法は永遠の原則である。あらゆる人は、何らかの法や規則に従っている。主は「いかなる王国にも一つの律法を与える。且ついかなる律法にもまた或る制規と条件ありて」と言われた。（教義と聖約88：38）

保護を法にゆだねる人々に対して、主は明白に述べておられる。「およそ律法によりて支配さるる者はまた律法によりて護られ、これによりて全くせられ聖くせらるるなり。律法を破り律法を守らずして己れの欲するところを行わんとし、進んで罪の中に住りまた全く罪の中に住る者は、律法によりてもまた愛憐、正義、審判によりても聖くせられ得ず。さればこれらの者たちは、なお常に穢れの中に止まらざるべからず。……すべて、これらの条件に堪え得ざる者は、皆義しとせられざるなり」（教義と聖約 88：34～35, 39）

ある時、税金のことでパリサイ人たちが救い主のところへやってきた。いつものように彼らが主をわなにかけようとしてやってきたことを知った救い主は、御自分にも税をおさめなさいとの言葉で答えられた。

「……彼らはデナリーつを持ってきた。そこでイエスは言われた、『これは、だれの肖像、だれの記号か』彼らは『カイザルのです』と答えた。するとイエスは言われた、『それでは、カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい』」（マタイ22：19～21）

カイザルのものと神のものはどのようにして見わけるのであろうか。どのような時に、またなぜ、人は政府、教会、雇用主、その他のものに従うべきなのであろうか。これらの質問に対する答えは、自由を求めて闘い続けてきた人間の精神を表わしている。

教会幹部は教会員に、混乱を避けるために政府、教会各々

の権威が人に与えられていることを知りなさいと常に教えている。

今日の世界では、反抗は日常茶飯事である。だが、そのようなふるまいの理由はさまざまである。あるものは故意にさからうことであり、あるものは決まりきった毎日の気晴らしである。また、変化が必要であると真剣に考えて反抗する人々もいる。

しかしながら、秩序ある社会を維持するためには、我々がみな何らかの法に従う必要がある。全員がほとんどの事柄には行動の標準のあることを知らなくてはならない。個人の権利を侵害されたと思う人がいたら、その人は行動の順序に従ってその理由を法的に正しく訴えることができる。

1965年10月の半期総大会でヒュー B. ブラウン副管長は法に従い法を敬い支えるという教会の立場を断言した。

「残念なことに、今日の我々の間には、法のもたらす恩恵を十分に受けていないことを国家に認識させようとして、法を破ることを主張する人々がある。彼らは、破った法は小さなもので、さらに大きな法を生みだす助けとなるから、それもある有益で正当だと言う。しかし、その理由はキリスト教の原則と矛盾する。そのような考え方はあらゆる人には自分の従う法と破る法を自由に選択する権利があるということである。そのような理論では秩序ある社会が建設されようはずがない。あらゆる人を安全に守る方法、法に基づく手段があるのであって、無責任に法を破ることによってキリスト教の徳を育てることができない。アナーキーの思想は無法な人々の心にまかれるのである。無政府状態は、神ではなく、むしろサタンのとる方法である。最近世界各地で起こる暴動は、おそろべき傾向を示している。権威に対して秩序に対して、秩序にのっとった社会の政体や権威を象徴するすべてのものに対して、無法の反抗がしばしば煽動されている」（インブルーズメント・エラ誌第68巻1965年12月 P. 1103）

結局、それらの暴動を解決するには主に頼るべきことが明らかである。なぜなら主は約束しておられる。「見よ、われはシオンの戦を為すことを彼らに求めず。そは、われ先の誠命によりて告げし如く、誠にわが約束を果すべければなり。すなわち、われは汝らのために戦わん」（教義と聖約 105：

聖アガペットは言った、「我々がいつも悪い人々と共に生活するなら、彼らのえじきか彼らの弟子になる。一方徳ある人々と交わるならば、我々も彼らの徳をまねて自身を形成するか、少なくとも自分の欠点が軽減される」

同輩や仲間の承認を得たいという望みは、人を動かす大きな要素である。よくない計画を持つグループにあって、みんなの承認を勝ち得るためには、その計画を自分も行なわなくてはならない。しかし、真理に従う者の目標は、天の御父によしと認められることである。

交際の結果として習慣が形成され、それによって人は交わる人々に影響されて、文化教養面の価値観を形成し、社会との関係を打ち立て、改善のためにどんなことを行なうかを決める。

今日の社会において最も大切な問題は、抑制を促進させることによって、勝手なふるまいを制限することであろう。いたる所で、おとなも青年も「さらに抑制されない自由」を主張している。中には彼らの自由と、他人の権利を抑制することの間に一線のひかれていることを知らない人々もいる。自分を甘やかせる権利というものに関してマッケイ大管長は言った。

「自由意志は進歩の源である。しかし、自由意志には責任が伴う。義に対して報われ悪に対して罰せられるのなら、公正であるためには人に独立して行為をなす能力がなくてはならない。もし人が常に正しいことを行なうよう強制されたりどうしようもなく罪を犯すようにしむけられたりしたなら、義に対する祝福も悪に対する罰も受けることがない。

よって、人の責任は自由意志に相当して働く。神より与えられた法と自然の法に調和した行ないは幸福をもたらす、真理に反する行ないは不幸をもたらす」(しあわせな生活の秘訣 P.154)

主に規定された範囲で自分の自由意志を行使するのは賢明であろう。しかし救い主は「われ汝らにすべての事を悉く命ずるは至当ならず。そは、すべての事已むを得ざれば為さざる者は怠惰なり、賢き僕にあらざればなり。これを以て彼は良き報いを受くることなし」(教義と聖約58:26)とジョセフ・スミスに言いたもうた。

強制によらないで民を治める秘訣を尋ねられた時、ジョセフ・スミスはこう言ったと記録されている。「私は彼らに正しい原則を教え、彼らは自分自身を治める」)ミレニアル・

スター誌 第13巻 P.339) この考えは抑制というものの理想を表わしている。

ほとんどの事柄において、個人の望みをまっすぐに整え、神より与えられた権利を主の望みたもうように行使する責任は、当然個人個人にかかってくる。それは、人は自分や自分の欲求をコントロールして、努力を価値あることに集中しなくてはならないということを意味する。

あらゆる組織のうち最も大切なのは家族である。良い家庭は思いやり深く義務感に富む父親と、よく気がついて信仰厚い母親と尊敬の心を持つ従順な子供たちから成る。家庭生活の標準が高ければ高いほど、人々は教会や社会にあって互いに対する責任をよく果たすことができる。

末日聖徒は一時的ではなく永遠の目標をめざして生活するので、家族の関係も永遠をめざして築かれなくてはならない。両親は互いに尊敬を示しあい、教会と俗世の両方の権威を尊重することを特に示さなくてはならない。真にしあわせな家庭は権威が民主的に働いて、管理する神権者にリードされる家庭である。家庭の人はそれぞれ最終的な決定をする前に自分の見解をよく考えるべきことを知っている。異なった意見を出しあうが、いったん考えが一致すれば、それは家庭の内外で彼らを結ぶきずなとなる。一つの結合体として存在する家庭生活は、権威の持つ目的をさらに意味あるものとする。

権威はそれ自体で終りとならない。むしろ、自分の生活や他人の生活に意味深いことを成し遂げるための手段を与えてくれる。

ヒュー B. ブラウン副管長は言った。

「私たちはあなたにチャレンジと責任を与える。それは、前途に大いなる仕事、為すべき働きが横たわっているからである。あなたや私たちの仕事とは教会や国家の権威を尊重し法に従い、規律に服すべきことを私たちの民に教えることである。私たちは彼らに国を愛する忠誠の心を教えなくてはならない。私たちの民は、法や秩序に逆らうデモ行進に参加すべきでないし、教会や国家の指導者を害したりおびやかしたりすることを目的とした組織に加わってはならない。

国の法律を尊重する心がないならば、神の法を尊重する心も当然失われる。あなたや私たちの仕事は、民の心を教育することである。価値をよく見定め、人柄をみがき、豊かに生きて、知性を神と隣人に対する愛で輝やかせよ、と彼らに教えなさい」(豊かな生活 P.240)

開拓者だった私の先祖



日本伝道部長

ウォルター R. ビルス

私の曾祖父のジョン・ウェスレイ・ビルスは、洋服の仕立を職業として、ペンシルバニア州に住んでいました。曾祖父は、教会の初期の会員で、予言者ジョセフ・スミスと兄のハイラム・スミスのおかかえの仕立師でした。ノーヴー軍団が組織された時、曾祖父は、補給担当の将軍に任命されました。

祖父のウィリアム・ビルスは、ソルト・レーク盆地で2番目に召された監督でした。彼は支部長として10年、監督として44年、合計54年もの間、同じ場所で責任を与えられていました。祖父は1847年、すなわちブリガム・ヤングが到着したと同じ年にソルト・レーク盆地に着きました。そして、ブリガム・ヤングの命を受けて、モルモンの開拓者の手車隊をソルト・レーク盆地へ引率するため、三度もウインター・クォータースへ向いました。彼は、手車隊の指揮をとっていました。また祖父は、彼の父つまり

私の曾祖父の仕立てた洋服をジョセフ・スミスにとどけに行った時の話、彼の子供達と一緒に遊んだことなどをよく思い出して私の両親に語ったそうです。祖母はわずか7歳の時に手車隊について平原を横断して200キロもの道のりを歩きました。

私は、子供の頃から曾祖父、祖父の話を聞かされ開拓者の受けた迫害、手車を押して、何千キロもの平原を横切ったその苦労、それらに打ち勝った曾祖父、祖父たちを誇りに思ったものでした。私は、この開拓者の精神が今日の私達にも受け継がれるべきだと思います。7月に開拓者記念日を迎えますが、もう一度、あの開拓者たちの持っていた燃えるような信仰、進取的な態度、従順、不屈の精神を考え、私たちの教会の奉仕の業にあてはめてみようではありませんか。

日本伝道部地方部宣教師紹介

今月は日本伝道部で働いているパートタイム宣教師をご紹介します。

彼らは、真の福音を知らず暗やみに迷っている人々に、回復された真理を教え、すでに昨年9月から今年6月までに67名の人々を改宗へと導びきました。このすばらしい働きを心から感謝します。一人一人が宣教師であることをさらに自覚し、ともに幸福をわかちあうため隣人へ語りかけ、紹介カードを提出しましょう。（6月5日現在地方部宣教師）

＜札幌支部＞

藤 中 民 子 姉妹



＜札幌支部＞

岩 浅 紀 子 姉妹



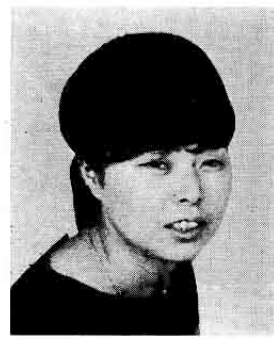
＜札幌支部＞

岩 浅 泰 子 姉妹



＜札幌支部＞

是 安 厚 子 姉妹



＜小樽支部＞

松 野 黎 子 姉妹



＜小樽支部＞

新井田 都美子 姉妹



＜旭川支部＞

三 浦 ルイ子 姉妹



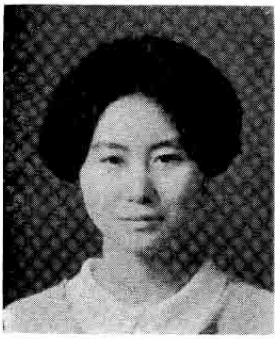
＜旭川支部＞

沢 田 扶三子 姉妹



＜新潟支部＞

高 橋 澄 江 姉妹



＜新潟支部＞

錦 沢 ヤ ス 姉妹



＜群馬支部＞

小 川 洋 子 姉妹



＜群馬支部＞

田中島 真 弓 姉妹



＜甲府支部＞

桂 島 まさ美 姉妹



＜甲府支部＞

保 坂 滋 子 姉妹



＜東京東支部＞

金 親 幸 子 姉妹



＜東京東支部＞

村 杉 香 姉妹



＜東京西支部＞

増 井 重 之 兄弟



＜東京西支部＞

高 江 万里子 姉妹



＜東京西支部＞

中 沢 ナヲ 姉妹



＜東京南支部＞

内 藤 亜沙子 姉妹



＜東京南支部＞

鈴 木 美賀子 姉妹



＜東京北支部＞

安 井 芳 子 姉妹



＜東京北支部＞

田 中 千鶴子 姉妹



＜横浜支部＞

佐々木 敏 子 姉妹



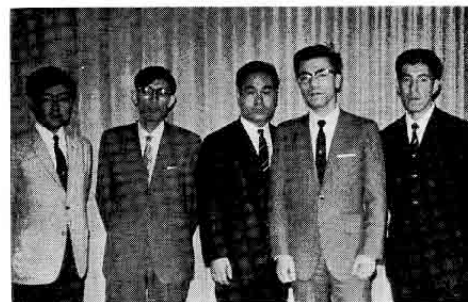
＜横浜支部＞

松 下 順 子 姉妹



支部長会変更

次の支部において役員変更がありましたので新しく任命された方を紹介します。



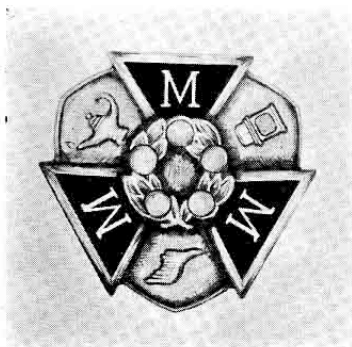
室蘭支部 (左より)

菅野(書記補), 川崎(書記), 梅津(第2)
三浦(支部長), 榎本(第1)兄弟



旭川支部 (左より)

潟沼(第1), 松倉(支部長),
山田(第2)兄弟



＊日本人最初のマスターMメンに輝く

5月の地方部大会で副伝道部長の神崎良太郎兄弟に、日本人としては最初の栄誉、“マスターMメン”が岡崎伝道部長より与えられました。古くからこの受賞計画はよく知られていながら、私たちはその栄誉に与ることがありませんでした。

今回、神崎兄弟は副伝道部長としてMIAの精神を理解するために範をたれる意味で努力され受賞の運びとなりました。このプログラムは賞を受けることが目的ではなく、多くの達成プログラムを通して、私たち各自が信仰を強め、神様の御業に仕え、リーダーシップを増すよう、幾多の才能と個性を伸すことが目的です。

マスター、Mメンのピン(左上の写真)をもっている人々は少く、このピンをもつことはモルモンらしさの象徴であり、栄誉です。今回の受賞にあたって、MIAの経験深い、岡崎伝道部長姉妹に感謝したいと思います。“日本人も必ず受けることが出来ます”の言葉が実証されたのです。

受賞された神崎兄弟は30歳の期限に2ヶ月を残すところで“急いで志願しました”と頬を赤らめていました。どうか伝道部内の兄弟姉妹たち、あなたもこのプログラムに参加されてはいかがですか。

そしてマスター・Mメン、ゴールデン・グリーナーの顔がたくさん増えますように。伝道本部に志願書が山程とどきますように。受賞者は順次この紙面をかりて発表いたします。＜左の写真は大会で神崎兄弟にピンと賞状を渡す岡崎伝道部長＞

＊支部紹介 北九州支部＜写真左＞

北九州の地より全国の兄弟姉妹にご挨拶。

支部長：早坂長老、第1副：宮沢兄弟、第2副兼書記：山内兄弟です、よろしく。



長崎支部＜写真右＞

支部の顔を見て下さい／強者(?)美人(?)そろいでしょ。支部長：矢野兄弟、第1副：大平兄弟、第2副：藤本長老、書記：リンデマン長老です、よろしく。



*YW・MIA百年祭に参加



早瀬久実子姉妹



*一人一針“千人針”の気持を送る

YW・MIAが創立されて今年の11月で百年目にあたり＜YW・MIAの百年祭＞として毎年ソルト・レーク市で開かれている6月大会(JUNE・CONFERENCE)の際に行なわれます。

私たちもこの記念すべき百年祭を祝い、参加の気持を示すために、日本に伝道部が開設されて以来の歴史的提案として当伝道部より正式の代表者を送り出すことに決めました。伝道部YW・MIAの会長である早瀬久実子姉妹がこの大役に召されました。

そして私たちの参加の気持を“日本人のほんとうの心”として一人一針の“千人針”による花刺繡を作成し送ることになりました。また、代表者の早瀬姉妹の旅費の一部を負担してさらに私たちが喜んで代表者を送り参加の気持を示したいと、会員よりの献金も集りました。

伝道部長はこのことに関し、日本人だけでなくアメリカの友人に手紙を書かれたところ、たくさんの人々から“私たちも手伝わせていただいて、ありがとう”という意外な、また嬉しい感謝の言葉と共に送金がありました。

“まきを割るものは2度ぬくもる”のたとえと共にこのたくさんの人々に祝福を与えるプログラムが先月号の伝道部長メッセージ“日本人だからこそ”にありましたように、誇りをもってどんなプログラムでも出来るという一例であると話されました。

＜写真右上、熱心に千人針を入れる姉妹たち。写真左、ほとんど出来あがった心のこもった花刺繡＞

*結 婚

私たちは結婚いたしました。どうぞよろしく。

3月21日 京都支部、玉屋晃生兄弟と長棟富美子姉妹。(写真中)

5月3日 神戸支部、梅原隆兄弟と久利礼子姉妹。(写真左)

5月3日 岡崎支部、坂本泰造兄弟と南条好子姉妹。(写真右)がご結婚されました。おめでとうございます。



十分にしないこと

リチャード L. エバンズ

仕事を減らすことを強調したり、怠慢を奨励したりする際には、仕事をする
ことの祝福、特権、喜びのあることも知る必要がある。また世界中には欲求の
満たされぬ人々や仕事を得られずに内心不満を抱いている人々もいることを知
らなければならない。

長時間労働に駆り立てられ、肉体的、精神的障害をきたすと、人々は今度は
極端に走り、労働を否定し、特に若者は怠慢になりその結果技術、技能、有用
性、仕事からのみ得られる自信と満足などの獲得を妨げられることになる。

建設的な仕事をなすことは人生の基本的法則である。すばらしい機能を備え
たすべての創造物——人類、自然、雨、日光、種の成長、それらのすべてに命令
する無限の精神——を見たまえ。そして次に何もしないことの、あるいは十分に
にしないことの愚鈍さを見たまえ。「つまらぬ人になる方法は何もしないこと
である」とナサニエル・ハウ¹は述べた。刺激が少ないかあるいは無であったり、
仕事から得られる満足が少ないかあるいは無であったりすると、若い人も年取
った人も不満になり、不幸になる。「神は働くことの特権をもって私達を祝福
なさっている。仕事は神の賜であり、……暇すぎるのは危険である。……
あなたの仕事を好きになるようにしなさい。『これは私の仕事であり、私の栄
光であり、決して私の悪運ではない』と言えるようになりなさい」とマッケイ
大管長²は語った。

「パラダイスを、あるいは調理済みの食品がなつたわんでいる木々のあるぜ
いたくな怠け島を、人類は絶えず夢見てきた。しかしそれは単に夢ではない、不
可能な夢なのだ。……労働は人類が継承しているものではないのか。……
人類の最高の祝福は働くこと、何のために働くかを知ることにある……」と
トーマス・カーライル³は言った。「未来にのびる長い並木道を眺め、我々はそ
れぞれのなすべき善を見る時、我々は結局働き、生活し、仕合わせであるのは
本当に美しいことであると認めるのである」とロバート・ルイス・スチーブン
ソン⁴は書いている。

- ① ナサニエル・ハウ、アメリカの宗教家
- ② デビッド・O・マッケイ大管長、福音の理想（497ページ）
- ③ トーマス・カーライル、英国の随筆家、歴史家、哲学者
- ④ ロバート・ルイス・スチーブンソン、スコットランドの小説家、随筆家、詩人

聖徒の道

1969年7月20日発行

振替口座 東京76226番

発行人兼編集人 ウォルターR. ビルス

発行所 東京都港区南麻布5-8-10

末日聖徒イエス・キリスト教会 電話(442)7438

印刷所 太陽印刷工業株式会社

定価 100円

予約 一年間1,000円(外国4ドル50セント)

電報受信略号「トウキョウ」マツジツ